

翻 訳

『匿名のガル年代記』第二巻（翻訳と注釈）

[第1章から第16章まで]

荒 木 勝

以下の翻訳は、写本ザモイスキ版、センジヴォヤ版、ヘイルスベルスキ版を検討したカール・マレチンスキ K. Maleczyński の校訂本を用いた (Galli Anonymi Cronicae et Gesta Ducum sive Principum Polonorum [Monumenta Poloniae Historica, Nova series, Tomus II, Cracoviae 1952])。

注釈に関しては、ビェロフスキ (A. Bielowski)、マチレンスキ、プレジア (M. Plezia)、グロデツキ (R. Grodecki)、ブイノッホ (J. Bujnoch)、シラフトフスキー・ケプケ (I. Szlachtowski, R. Koepke) に拠った。注釈においては、注釈者の見解をそれぞれに

Bielowski → [Bi]、Plezia → [P]、Grodecki → [G]、Bujnoch → [B]、Maleczyński → [M]、I. Szlachtowski, R. Koepke → [S]

と略記し、以下にその見解を紹介した。それ以外の注釈は訳者のものである。参照した翻訳は、グロデツキ訳をふまえたプレジアによるポーランド語訳 *Anonim tzw. Gall, Kronika Polska*, Kraków 1982 [BIBLIOTEKA NARODOWA, Nr. 59]、ブイノッホのドイツ語訳 *Polens Anfänge, Gallus Anonymus, Chronik und Taten der Herzöge und Fürsten von Polen*, Verlag Stria, Graz-Wien-Köln 1978 である。典拠については、聖書は、シュトゥットガルト版の *Biblia Sacra iuxta Vulgatam Versionem* 1969（その翻訳は、とくにことわりがない限り、『合同訳聖書』日本聖書協会、1991年）に拠った。ギリシヤ・ラテンの古典については、*The Loeb Classical Library* に拠った。12～13世紀の東欧の年代記類については、*Monumenta Germaniae Historica, Scriptorum* に拠った。

献呈の手紙

神の恩寵の下にあり、尊敬すべき分別の人である司教パーヴェル師に¹⁾、また模範とすべき敬虔の人であり²⁾、私の協力者である尚書官ミハウに³⁾、貧しい食卓給仕人⁴⁾の私は謹んで息子のような敬愛の情と心からの奉仕の意を表するものです。多くの事柄を思いめぐらす時、あなたがたの寛やかな愛情と、神によってあなたがたに与えられた知恵⁵⁾と、人に知られた有徳の名声がい出されます。その名声は遠く、また広く伝えられています⁶⁾。しかし、物語る力が貧しくてうまく表現できないことでも、心の中に感じたその意図はおおよそ思い描くことができます。それゆえ、言葉で表現する代りに、善意の心だけで十分ではないでしょうか。

人ありて、その為しうる所を為さば

その時、誹りは、不当とならん⁷⁾。

しかしながら、かくも卓越した人々の栄光を、またかくも信仰厚き高位聖職者への追憶を、沈黙したまま素通りしたと思われぬように、彼らに称賛の言葉を献げようと思います。とは申しても、私の筆はチベル川の深淵に泉の滴を注ぎ込むようなものであります⁸⁾。なるほど、完全なるものには、それに増し加えるべき余地などありえないことは、自然の理であります⁹⁾、これを文章や称賛の声によって誉め称えることまで理性は禁じてはいません。また絵画において、その作品に変化をつけるために、美しい色彩に黒色を塗り加えたとしても、誰も、不当なこととは見なさないでしょう¹⁰⁾。また、王の食卓には、しばしば日毎の美食に対する吐き気を取り除くために、粗末な品が出されることもあります。さらに蟻は、体の大きさではラクダに比べられるような動物ではないけれども、自分の仕事を熱心に果し、その力はラクダと等しいものがあります¹¹⁾。従って、このような事柄を範としつつ、本来称えられるべきでありながら、いまだかつていかなる称賛もうけたことのない人々に賛辞を呈するために、片言を語す子供の言葉を用いようと思います¹²⁾。しかしまたイスラエル人への賛美の言葉のように¹³⁾、欺きのない誠の心を込めて称えたく思います。なぜなら、これらの人々の称賛されるべき生活、明晰な学問、模範とすべき行い、救いをもたらす説教、哲学の二つの山から流れ来たる彼らの知恵¹⁴⁾、これらがうっそうとした森の国ポーランドを明るく照らして

いるからです。彼らはまた、かつて耕されたことのない人の心の土地に、神の言葉の斧を用いて茨と薊を根元から引き抜き¹⁵⁾、はじめて信仰の麦の種を播きました。彼らはまた、倉から新しいものと古いものを取り出す方法を知っている家の主に似ており¹⁶⁾、また傷ついた人に対して、その傷口を縛り、ブドウ酒と油を上から注ぎ込むサマリヤ人に似ています¹⁷⁾。また彼らは、僕達に小麦を正しく量って配り、

タレントを隠さず¹⁸⁾、高利にて分ち与う¹⁹⁾。

しかしなぜ無口な者が能弁な者について語ろうとするのか。またなぜ貧しい才能の少年風情がこのような深淵な事柄に関わろうとするのか。

しかしながら我が無知を大目に見たまえ

我が善き志に留意されまし²⁰⁾。

偉大なる師父達よ。神より賜わった分別を持たれた方々よ、私の苦心の作品が何を、またどれ程のものを生み出したか、ではなく、私が何を望み、また私の力がどれ程その労苦に耐えたかを理解していただきたい。なぜなら、力ある者は、貧しい友人が彼に自分の労作を差し出した時には、たとえそれが小さなものだとしても、その作品ではなく贈り主の気持を考慮し、これを大きな贈り物として受け取るからです²¹⁾。ともあれ、寛大な師父達よ、あなたがたの君主や祖国を称えるために、子供らしい内気な筆によって書き記したこの小品を収めて下さい。またある方々の大きな権威と心からの好意によって、この小品を推奨して下さい。そうすれば全能の神は、この世と永遠の世の善きものをあなたがたに豊かに加えられることでしょう。

(LIBER SECUNDUS) INCIPIT EPISTOLA

Domino Paulo, Dei gratia Poloniensi reverende discretionis episcopo¹⁾ :
suoque cooperatori imitande²⁾ religionis Michaeli cancellario : modici
dispensator obsonii⁴⁾ paterne venerationis ac debite servitutis obsequium.
Meditanti mihi de plurimis iniecit se vestre recordatio largissime
karitatis, : vestraque fama : longe lateque diffusa⁶⁾ : vobis collate
divinitus sapientie⁵⁾ ac humanitus probitatis. : Sed quia plerumque capax
mentis intentio concipit, : que tarda loquendi facultas non exprimit, :

bone voluntatis intencio sufficiat pro loquela. :

Nam cum facit quis, quod potest, tunc iniuste fit querela⁷⁾

Verum tamen ne tantorum virorum gloriam, : tamque religiosorum memoriam : prelatorum silencio preterire videamur, : eorum laudibus insistendo quasi guttam de fonticulo comportare Tyberinis⁸⁾ gurgitibus innitatur : Licet enim, quod perfectum est non possit naturaliter augmentari, : ratio tamen non prohibet illud scriptis laudumque preconiiis venerari⁹⁾. :

Nec indecens in picturis aliquando iudicatur

si preciosis coloribus pro varietate operis niger color inseratur. : In mensa quoque regum sepe quoddam vile presentatur edulium¹⁰⁾, : quo deliciarum propellatur cottidianarum fastidium. : Insuper etiam formica, cum sit camelo quantitate corporis animal inaequale. : opus tamen suum exercet studiose, : suis viribus coequale¹¹⁾. : Quarum exemplo rerum inductus, balbutientis more puerilia verba¹²⁾ formare conor in laudem virorum per se laudabilium adhibita sine laude, : vel in preconium Israhelitarum¹³⁾ veraciter sine fraude. : Quorum vita laudabilis, : doctrina perspicabilis, : mores imitabiles, predicacio salutaris, : quorum sapientia bicipiti philosophie monte¹⁴⁾ derivata, condensa silvarum Polonie sic sagaciter illustrat, ne prius triticeum fidei semen in terram humani cordis incultam spargant, : donec inde spinas et tribulos¹⁵⁾ verbi divini ligonibus radicitus expellant, : similes existentes etiam homini patri familias scienti de thesauro proferre nova et vetera¹⁶⁾ : vel Samaritano vulnerato¹⁷⁾ plagas alliganti, vinumque desuper et oleum infundenti : Qui triticum quoque conservis fideliter distribuunt ad mensuram, :

Et talentum¹⁸⁾ non abscondunt sed dividunt ad usuram¹⁹⁾

Sed cur mutus fari nititur de facundis, : vel ingenii puer parvi cur implicat se tam profundis. :

Parcat tamen ignorantie,
parcat et benivolentie²⁰⁾

Magni patres, : vestre discrecio sanctitatis nec perpendat, : quid vel quantumlibet sui laboris offerat, : sed quid captet nostre desiderium facultatis. : Nam cum potenti pauper amicus quantumlibet sui laboris minimum amministrat, : non donum sed dantis affectum perpendens, illud recipere magno pro munere non recusat²¹⁾. Igitur opusculum, almi patres,

stilo nostre pusillanimitatis ad laudem principum et patrie vestre pueriliter exaratum suscipiat et commendet excellens auctoritas et benivolentia vestre mentis, : quatenus Deus omnipotens bonorum temporalium et eternorum vos amplificet incrementis. :

- 1) [訳注] 司教パーヴェルは、ポズナニ司教、クヤーヴィ司教のどちらかの聖職者であったと考えられている（第一巻「手紙」の注3を参照）。
- 2) [M] もしも、この箇所に対して、*immitende* という読み方が認められるならば、この箇所はキリスト教信仰へとポモジャ人を改宗させたパーヴェルとミハウの功績を記していると考えられる。T. Tyc, *Zbygniew i Bolesław*, Poznań 1927 p. 45. P. David, *Les sources de l'histoire de Pologne à l'époque des Piasts*. Paris 1934. p. 41 [B] マレチンスキは、“*imitande*”の代りに、*M.P.H* のビエロフスキに拠る“*immittendae*”という読み方を挙げているが、これはザモイスキ版とセンジヴォイ版に基いているものである。この読み方に従えば、大法官ミハウはポモジャ人の改宗の助け手として登場することとなる。グンプロヴィッチも“*Bischof Balduin Gallus von Kruszwica*”において、この読み方を採っているが、それは、クルシヴィツァの司教区における、スラヴ典礼に代るラテン典礼の導入の手助けという意味を与えられている。
- 3) [訳注] 第一巻「手紙」の注4を参照。
- 4) [P] “*szafarz szczupłej okrasy*”「貧しい食卓の執事」——著者はこのように自分を呼んだ。
- 5) [M] *Vita Adalberonis* (*M.G.H.SS. IV*. 667) “*data tibi a Deo sapientia*.”『アダルベローヌスの生涯』「神により汝に与えられた知恵」。*Cosmas II prol.* “*tibi a Deo collata sapientia*.”『コスマの年代記、第二巻 プロローグ』「神によって汝に与えられた知恵」。
- 6) [M] Vergilius, *Aeneis*. IV-378 “*longe lateque per urbes*.” ヴェルギリウス『アエネアス』第六巻一三七八「町を越えて遠く、また広く」。*Augustinus, Civitas Dei* 15-13 “*gentem tam longe lateque diffusam*.” アウグスティヌス『神の国』一五一一三「遠く、また広く散らばっている部族」。
- 7) [M] 二連八音節トロカイクの詩。Pohorecki, *Rytmika* 12.
- 8) [M] Persius, *Satire* II. 15. “*Tiberino in gurgite mergis mane caput*.” ペルシウス『諷刺詩』二巻一五「汝は渦巻くチベル川に頭を沈め……」（[訳注] チベル川は、イタリアのローマ市を貫流する川である。）
- 9) [P] “*Naturaliter—w porządku natury*”——超自然の秩序とは異なるもの—自然的秩序——という言葉は、『年代記』の中では数少ない、作者の哲学的素養を示す箇所の一つである。」
- 10) [M] 八音節のトロカイクの詩。
- 11) [M] Horatius, *Ars Amandi* 38 “*sumite materiam aequam viribus*” ホラティウス『愛の技』三八「力において等しきものを受け取れ」。
- 12) [B] 気取った作者の遠慮の表現。[M] Adamus Bremensis, *Gesta*. 2. “*balbutiens audeam cum philosopho loqui*.” アダム・ブレメンスキ『事績』二「どもりながら、哲学者とあえて対話しよう。」

- 13) [B] おそらく『ヨハネによる福音書』一四七との関連で理解されるべきであろう。「見なさい。まことのイスラエル人だ。この人には偽りが無い。」作者ガルにとって、ポーランドの司教達は、ナタニエルの場合のような真のイスラエル人の如く、真実の人であり称賛されるべき人であった。
- 14) [P] 古典古代の神話に登場し、またローマの詩人達によって歌われたミューズの山バルナッソスへの比喩。哲学の二つの頂きとは、中世において哲学の先達として認められていたプラトンとアリストテレスを指す。
[M] Persius, *Prologium*. "Nec in bicipiti somniasse Parnasso" ベルシウス『序言』「バルナッソスの二つの頂きで夢も見ずに」。
[訳注] プレジアはこの箇所を、年代記作者の哲学的素養の傾向を示すものと解し、第一巻のミュシコの盲目に関する記述および第二巻第四三章のプルシャ人に対する叙述と併せて、作者のアリストテレス的、スコラ学的傾向を示すものとしている。そしてこのような実在主義的な傾向は、常にベネディクト修道会の中に生き続けていたとする。M. Plezia, *Kronika Galla na tle historiografii XII wieku*, Kraków 1947. p. 128.
- 15) [M] Genesis, 3—18, "spinas et tribulos germinabit tibi" 『創世記』三—一八「お前に対して土は茨とあざみを生えいでさせる。」
- 16) [M] Mattheus, 13—52 "qui profert de thesauro suo nova et vetera," 『マタイによる福音書』一三—五二「自分の倉から新しいものと古いものを取り出す。」
- 17) [M] Luca 10—34 "Samaritanus …… alligavit vulnera eius, infundens oleum et vinum." 『ルカによる福音書』十一—三四「傷に油とぶどう酒を注ぎ、包帯をして。」
- 18) [M] Mattheus, 25—25 "et timens abii et abscondi talentum tuum in terra." 『マタイによる福音書』二五—二五「恐ろしくなり、出かけて行って、あなたのタラントンを地の中に隠しておきました。」
- 19) [P] 『マタイによる福音書』第二五章の一四節から三十節までの譬話を典拠とする。
[M] 二連八音節トロカイックの詩。Levit. 25—37. "pecuniam tuam non dabis ad usuram." 『レビ記』二五—三七「あなたは利子を取って、金を貸してはいけない。」
([訳注] (ヘブライ語聖書に忠実なウルガータ訳聖書に従って訳した。))
- 20) [B] 二音節の脚韻を持つ二連九音節トロカイックの詩。
- 21) [M] Einhard, *Vita*. 13. "Pro magno munere concessit" アインハルト『カール大帝伝』一三「大きな贈物として引き渡した。」*Cosmas* I—13. "scias tibi pro magno munere hoc dari." 『コスマの年代記』第一巻一三「あなたはこれが自分に大きな贈物として与えられていると思うだろう。」

手紙が終り、エピローグが始まる

二三七

我等の側に立ち、我等にこの物語を語れ¹⁾。

汝等、もし望まば、

こは汝等によりて、多くの人に称えられん。

我等がしばし、労苦より身を休めんも²⁾

誰もそを訝しと思う者なし、
 今や休息の時なれば。
 我等、国々を巡り訪ねしが、
 なおよくその道を知らず、
 されば、道を知る人に尋ねん。
 我等、今や眠りから立ち上るべき時なり³⁾。
 すでに良く眠りたれば、
 我等日がな一日道を尋め求めしが、
 この日すでに過ぎたれば、
 来るべき日に思いをいたさん⁴⁾。
 神の御導きの下にこそ、
 書き始めし事柄を追い求めん。
 すでに幾度も触れし事たるも、
 今や隈無く明らかにせん。
 さらにまた不明に残し置き事どもを、
 今こそ書き加えて補わん。

EXPLICIT EPISTOLA INCIPIT EPYLOGUS

Nobis astate, : nobis hoc opus recitate¹⁾,
 Per vos, si vultis, : opus est laudabile multis
 Non est mirum a labore si parum quievimus²⁾
 Tempus erat quiescendi, tot terras transivimus
 Neque ceptum iter bene cognitum habuimus,
 Sed per illos, qui noverunt paulatim inquirimus
 Exurgamus iam de sompno, nam satis dormivimus³⁾
 Vel unius iam diei viam inquisivimus;
 Hac expleta de futura satis cogitabimus⁴⁾.
 Duce Deo prosequamur quod interposuimus
 Persolvamus, quod frequenter supra titulavimus
 Et addamus, si quid minus ignoranter diximus

- 1) [B] 原文は、二連のレオ詩脚のヘクサメトロ。それに続いて十連の十五音節のトロカイックの詩。それらはすべて二重音節で押韻されている。
- 2) [訳注] この箇所について、第一巻と第二巻の叙述の間には、一定の中断の時期が介在したという説と、それらの見解に対する批判については、グンプロヴィチの下記の論文を参照。M. Gumplowicz, Bischof Balduin Gallus von Kruszwica, in *Sitzungsberichte der Kaiserlichen Akademie der Wissenschaften in Wien*. 1895. p. 27–29.
- 3) [M] Rom. 13–11. “quia hora est iam nos de sommo surgere.”『ローマの信徒への手紙』一三——「あなたがたが眠りから覚めるべき時が既に来ています。」
- 4) [P] この箇所は、原典において例外的に一音節の韻である。

第二巻の始まり

第一章 ボレスワフ三世の出生について

さて、少年ボレスワフは、聖ステファン王の祭日の日に生れた¹⁾。しかし彼の母は、その後、衰弱して主の生誕の夜に身罷った²⁾。この女はとりわけ自分の死の前日、貧者と囚人に慈悲の業を施し、自分の財産によって多くのキリスト教徒をユダヤ人から買い戻し、解放した³⁾。彼女が亡くなった後、太って足を病んでいたウァディスワフ公には、年端もいかぬ少年が残されたので、公は皇帝ハインリッヒ三世の妹と結婚した⁴⁾。彼女は以前ハンガリア王ソロモンの妻であった⁵⁾。ウァディスワフ公は彼女から息子は一人も儲けなかったが、三人の娘を儲けた。その一人はロシア人と結婚し⁶⁾、もう一人は自分の頭を聖衣で被い⁷⁾、最後の一人は公自身の身内の一族の者と結婚した⁸⁾。しかしながら、かくもすばらしい子供の親について、わずかばかりの言葉でやり過ごすのは正しくないであろう。そこでウァディスワフの名誉のために、騎士としての彼の業をいくらか取り挙げてみることにしよう。

二三
五

さて、婚姻関係によってローマ皇帝と結びついたポーランド公ウァディスワフは、ポモジャ人の城を包囲し、また、その城を救うために駆けつけてきた新手のポモジャ人の軍勢にも打ち勝ち、彼らの傲慢を足下に踏み敷いたのであった。そしてまたその勝利の喜びを神の母の昇天の祭りによってさらに二倍の大きさに引き上げたのである⁹⁾。彼らに勝利した後、ウァディスワフは奥地にも、また海岸にもあった彼らの都市と城塞を力づくで占領し、配下の代官¹⁰⁾と伯を主な場所と砦に配置した。そして異教徒の背信に対しては、反抗

の気を完全に挫くべく、配下の者に特定の日の特定の時刻にこの国のすべての城塞を焼き払うように命じた。このようにしてもなお

抗う種族を押し去ること能わず¹¹⁾

というのは、彼らは、当時、軍の司令官であったシェチェフ¹²⁾が彼らを治めるために任じた人々の一部をその過失を理由に虐殺したからである。他方、より賢明に、より正しく振る舞った高貴な家柄の人々は、縁者の同意を得て、かろうじて逃亡することができた¹³⁾。

INCIPIT SECUNDUS LIBER TERTII BOLEZLAUI

(1) PRIMO DE NATIVITATE

Natus igitur puer Bolezlaus in die festo sancti Stephani regis fuit¹⁾ : mater eius vero subsequenter infirmata nocte dominice nativitatis occubuit²⁾ : Que mulier in pauperes et captivos ante diem precipue sui obitus opera pietatis exercebat : et multos christianos de servitute Iudeorum suis facultatibus redimebat³⁾ : Illa mortua Wladislaus dux, quia homo gravis egerque pedibus erat, : et etate parvulum habebat, : sororem imperatoris tertii Henrici⁴⁾ uxorem prius Salemonis Vngarie regis⁵⁾ in matrimonium desponsavit : de qua nullum filium, sed tres filias procreavit. : Una quarum in Rusia viro nupsit⁶⁾ : una vero suum sacro velamine caput textit⁷⁾ : unam autem sue gentis quidan sibi counivit⁸⁾ : Sed ne tanti pueri parentem nudo sermone transeamus, : aliquo eum ornamento militie vestiamus. : Igitur Polonorum dux Wladislaus, : Romanorum imperatori maritali connubio counitus, : de Pomoranis succurrentibus suis castrum eorum obsidendo triumphavit, : eorumque contumaciam suis sub pedibus annullavit, : eiusque victorie gaudium Dei Genitricis assumptio geminavit⁹⁾ : Quibus victis civitates eorum et municipia infra terram et circa maritima violenter occupavit, : suosque vastaldiones¹⁰⁾ et comites in locis principalioribus et munitioribus ordinavit. : Et quia perfidie paganorum omnino voluit insurgendi fiduciam amputare, : suosmet prelatos iussit nominato die in hora constituta omnes in meditullio regni municiones concremare. : Quod ita factum fuit.

Nec sic tamen gens rebellis edomari potuit¹¹⁾

Nam quos Setheus¹²⁾ eis prefecerat, : qui tunc milicie princeps erat, :
partim pro eorum noxa peremerunt, : nobiliores vero discretius et hones-
tius se habentes, vix amicorum assensu fugaverunt¹³⁾. :

- 1) [M] 一〇八五年八月二十日。ハンガリア王聖ステファンは一〇八三年に聖人に叙せられる。
- 2) [M] 一〇八五年十二月二四・二五日。バルゼル *Genealogia* によれば、一〇八六年。『コスマの年代記』 *Cosmas* II 36によれば、一〇八五年である。
- 3) [M] 『コスマの年代記』第二卷三六は、貧民と囚人に対するユデットの善行に触れている。
[訳注] 『コスマの年代記』第二卷三六に、次のような叙述がある。“Haec cum esset sterilis, semetipsam semper mactabat offerens vivam hostiam Deo cum lacrimis, vacans elemosinis, viduis subveniebat et orphanis, aurum et argentum nimis large dispartiens per monasteria, commendabat se orationibus sacerdotum, ut per suffragia sanctorum quam natura negaverat ex divina gratia prolem obtineat.
「彼女にはまだ子供がなかったので、いつも涙とともに神に対する供え物として自分の身を捧げ、喜捨の業に意を用い、やもめと孤児に手を差し伸べ、修道院に夥しい金銀を与え、修道士達の祈りに身を委ねて、自然が拒んだものを聖人達の執り成しの力によって神の恩寵による子の御授かりを得たいと願った。」
- 4) [M] ハインリヒ四世。ローマ皇帝としてはハインリヒ三世として、一〇五三年七月一七日から一一〇六年八月七日まで即位。
- 5) [M] ハンガリア王サロモン。一〇六三年から一〇七四年まで在位。一〇八七年に没する。彼女の名はユデット・マリア Iudith Maria で、ハインリヒ四世の妹であり、ハンガリア王ソロモンの妻であった。バルゼルによれば、彼女とヴァディスワフとの結婚は、一〇八八年に行われたとされる。 *Genealogia* p. 106, p. 116. グロデツキは、一〇八九年の前半であったと主張する。 *Zbigniew* p. 76.
- 6) [M] ヴァディスワフ・ヘルマンとユデットとの間に生れた娘の一人で、その名前は知られていない。彼女は、ウラディミール公ヤロスワフの妻となった。従ってヤロスワフはこれによってボレスワフ・クシヴウスティの縁者となった。この結婚は、バルゼルによれば (*Genealogia* 124.) 一一〇七年以前に行われた。彼女は一一一二年に没する。
- 7) [M] ヴァディスワフ・ヘルマンとユデットの娘の一人。バルゼルはその名を知らないが (*Genealogia* p. 124.) おそらく、ガンデルスハイムの大修道院の院長アグネスであろう。その修道院の歴史家エーベルハルトは、彼女をハインリヒ四世の妹の娘としているからである。彼女の院長としての在職期間は、一一一〇年から一一二五年の間であった。
- 8) [訳注] プレジニアによれば、彼女の名前も、結婚の相手も不明であるがバルゼルによれば、彼女はポーランド貴族と結婚したこととなり (*Genealogia* p. 125-126) ヒエロフスキによれば、ポモジャ公シフィエントペウクと結婚した、とされ (*M. P. H. t. I* p. 429)、ポラチクブナによれば、彼女はヴォーベルグの騎士ディポ

ルドスの妻であり、その名をアデルハイドとしている（*Polaczkówna, Przyczynę do genealogii piastów* [Mies. Herald. 1932. nr 5—6]）。

- 9) [M] この戦は一〇九〇年八月十五日に行われた。
- 10) [B] “Vastaldiones” ヴァスタルディン（またはヴァスタンディオ Vastandio）は、ランゴバルド族において、国庫の支配人・管理人であり、また都市と領地管区の長官であった。この言葉の使用から、年代記作者の出身をイタリアとする説が立てられた。
- 11) [M] 十五音節のトロカイックの詩。
- 12) [M] シェチュフ Sieciech。トボル氏族の者で、ウァディスワフ・ヘルマンの宮廷伯。
[P] スターシ・トボルチク族の人物で、ポーランドの十一世紀末の歴史に重要な役割を演じた。彼がボレスワフ・シミアウイの追放、そしておそらくはその息子ミエシコの死因に著しく関与していたとする見解も根拠がないわけではない。
- 13) [P] ここから以下の点が引き出される。すなわちポーランドとポモジャの有力者達は互いに血縁関係にあったが、他方、シェチュフが任命した役人達はこのような関係を持っていなかった、ということである。シェチュフは通常、身分の低い人々を起用していたからである（第四章の冒頭部分を参照）。

第二章

さて、ウァディスワフ公は、自分に加えられた不正を忘れず、四旬節の前に、強力な軍勢を率いてポモジェ人の地に押し入り、その地で主たる断食の日々を過ごした¹⁾。こうして、そこでできるかぎり長く断食を行った後で、突然、人の数も多く、物産にも富んだ湾岸の地に侵入し²⁾、そこから多くの戦利品と数え切れない程の捕虜を獲得した。さて、ウァディスワフが不安の念も抱かずに³⁾戦利品を持って帰路につき、安心して王国の国境に急ぎつつあった時、彼らを追ってきたポモジャ人が突然ウァダという川の辺りでウァディスワフの軍勢に襲いかかった⁴⁾。まさしく主の枝の日の前日に⁵⁾双方にとって残酷で痛ましい戦いが行われた⁶⁾。この戦はおよそ一日の三つの刻に始められ⁷⁾夕方⁸⁾の薄明のうちに終わった。一方でポモジャ人は、夜の暗闇⁹⁾を砦として纏い、他方、ポーランド人はドジと呼ばれている勝利の野を確保した⁹⁾。しかし、キリスト教徒の側に災いがあったのか、異教徒の側に災いがあったのか、その点は疑しく、不確かである。全能の神が、四旬節を守らなかった者に対して懲^{こらしめ}のためにこの鞭を揮われたと思われる。それは、後に、この危険から逃れた者に証されたのであった。

さて、今述べたように、勝利は多くの者にとって痛ましいものであり、多大な損失をもたらすものであった。それに加えて、主の復活の日が近づいていたので、帰還の声が追跡の主張に打ち勝ったのである。

(2)

At Wladislauus dux, illate suis iniurie reminiscens, cum forti manu terram eorum ante quadragesimam introivit : ibique ieiunii plurimum adimplevit¹⁾. : Expleta itaque ibi ieiunii parte quam plurima sinum terre populosiorem et opulenciozem ex inproviso intravit²⁾. : indeque predam inmensam et captivos innumerabiles congregavit. : Cumque iam cum sua preda nichil dubitans³⁾ remearet, : iamque securus sui regni finibus propinquaret, : Pomorani subito subsequentes eum super fluvium Uuda⁴⁾ invaserunt, : bellumque cum eo pridie Palmas⁵⁾ cruentum et luctuosum partibus utrique⁶⁾ commiserunt : Illud enim prelium hora quasi diei tertia est inceptum⁷⁾, : vespertino vero crepusculo diffinitum : Pomorani tandem pro munitione noctis caliginem⁸⁾ induerunt, : Poloni vero campum victoriae Drzu⁹⁾ vocabulo tenuerunt. : In dubio enim pependit, : utrum christianorum lues an paganorum ibi extiterit. : Quod flagellum Deus, ut credimus, omnipotens in transgressoribus observancie quadragesimalis ad correccionem exercuit, : sicut quibusdam postea de ipso liberatis periculo revelavit. : Et quia luctuosa et dampnosa, sicut dictum est, victoria multis erat, diesque dominice resurrectionis imminebat, : vicit ratio redeundi, : consilium dantium persequendi. :

1) [P] 一〇九一年。大断食 Wielki Post は二月二五日から四月十二日の間になされた。

2) [訳注] この場所がどこであったかは今日まで不明である。マレチンスキは、グダニスク近郊かピアウォグルッド Białogród の辺りを想定している。また、テキスト本文の “sinum terre populosiorem” は、ザモイスキ版、ヘイルスベルスキ版では、summi となっているが、ここから、“summi” を古文書学的視点から “Stetin urbem” と読んで、今日のシチェチン地方を想定する見解もある。

3) [M] Act, 10—20. “vade cum eis nihil dubitans” 『使徒言行録』十一—十二「ためらわないで一緒に出発なさい。」

4) [訳注] ビエロフスキによれば、この川はノテツ Noteć であり、グンプロヴィッチによればドラヴ川 Drawa の近くのウェーデル湖 Wedelsee であり、デュダによれば、ノテツに入るグヴダ川 Gwda であり、グロデツキ、プレジニアはブダ川 Wda

である。この川は、シフィチェ Świecie の近くでヴィスワ川に注ぐ。

- 5) [P] 一〇九一年四月五日。
- 6) [M] *Kronika Mistrza Wincentego*, Liber II (*M.P.H.t.z*, p. 304) "Initur proelium luctutso utrimgue dispendio" 『マギステル・ヴィンセンティの年代記』第二巻「双方にとり残酷で犠牲の多い戦」。
- 7) [P] はば九時ごろ。
- 8) [M] *Kronika Wincentego* (ibid.,) "Vix noctis dirimitur caligine." 『ヴィンセンティの年代記』第二巻「夜の暗闇によって、あやうく止められた。」
- 9) [訳注] ヴィンセンティは Drecini と呼んでいるが、諸説が立てられている。ビエロフスキは、ノテツ川沿いのドレズデンコ Drezdenko (Driezen)、グンプロヴィツチはウェーデル湖に近いレーツェン Reatzen、ケンチシンスキ、グロデツキ、センキヴィチ、プレジニアも、チャルナ・ヴォーダ川 Czarna Woda 沿いの、シフィチェに近いドジチム Drzycim を想定している。

第三章

しかしながら、ウァディスワフは、聖ミカエルの祭日に¹⁾、ボヘミアから三部隊を援軍として呼び寄せ、再びまたポモジャに攻め入った。さて、その地におけるナクウォ城包囲の時²⁾、聞いたこともないような不思議なものが彼らを襲った。それは毎晩、武装して敵に打ちかかろうと構えていた兵士達を恐怖で打ちのめした。兵士達は長い間、この幻に苦しんでいたが、その姿形を知って、さらにいっそう驚愕した。ある晩、兵士達はいつもの恐怖に駆り立てられ、さら砦を抜け出して、絶間なく動き回る暗闇の影を敵の報復かと錯覚して追跡した³⁾。その間、城の者はすばやく堡壘から降り、ポーランド兵の城攻めの兵器や陣営の一部を焼き払った。こうしてポーランド人は、

得るところ何もなく

戦に出会わず⁴⁾

軍勢の大部分が、とくにボヘミア兵が食糧に乏しかったので、無益に力を使い果しながら⁵⁾撤収していったのである。

こうしてポモジャ人は、次第にポーランド人に傲慢な態度を取るようになった⁶⁾。もちろん彼らは、後に描くように、マルスの子によって根絶しにされたのではあるが⁷⁾。

しかしながら、喜ばしい題材だけを抜き出していると思われたくないし、故意に省略したという汚名よりも、むしろ悪意ある人の悪口に耐えた方がま

しである。またある程度、この話の中に正嫡とともに妾の子⁸⁾が取り上げられたとしても、分別のある人には不合理なこととは思われないであろう。事実、『起源の書』には⁹⁾互いの不和のために父によって引き離された、アブラハムの二人の息子のことが記されている。二人は確かに家父長の種から出たものであるが、相続財産の権利において、平等ではないのである。

(3)

Itemque de Bohemia tribus aciebus in auxilium evocatis, : Pomoraniam invadit Wladislauus circa sancti sollempnia Michaelis¹⁾ : Ibique castrum Nakel²⁾ obsidentibus inaudita mirabilia contingebant, : que singulis eos noctibus armatos et quasi in hostes pugnatuos terroribus agitabant. : Cumque talem delusionem diutius paterentur, : et quidnam illud esset vehementius mirarentur, : una nocte pavore solito concitati longius a castris exeuntes, : nocturnas umbras quasi palpitantes : delusi hostium vicissitudine sequebantur³⁾ : interim vero oppidani properanter de propugnaculis descenderunt, : eorumque machinas partemque stationis combusserunt. : Itaque Poloni

Cum se nichil profecisse : nec se bellum invenisse⁴⁾

conspicerent : et cum magna pars exercitus, presertimque Bohemi victualia non haberent, : incassum labore consumpto⁵⁾ redierunt : Sicque Pomorani contra Poloniam paulatim in superbiam sunt erecti⁶⁾ per puerum Martis, quem calamo pingimus, exstirpandi.⁷⁾ : Sed ne letam exenterare materiam videamur, : malorum invidiam potius quam detraccionis infamiam patiamur. : Nec absurdum ullatenus ulli discreto videatur, : si in hac historia cum legitimo concubine⁸⁾ fillius inducatur. : Nam in historia⁹⁾ principali duo filii Abrahe memorantur, : sed ab in vicem a patre pro discordia separantur : Ambo quidem de patriarche semine procreati, : sed non ambo iure patrimonii coequati :

二
三
九

1) [P] 1091年九月二九日。

2) [M] ノテツ川に沿った砦。

3) [M] *Kronika Wincetego* (M. P. H. t. z) p. 304 “umbras hostium saepe insectantur” 『ヴィンセンティの年代記』第二巻「しばしば敵の幻を追跡した。」

4) [M] 二連の八音節トロカイックの詩。

- 5) [M] Levit. 26-20. "consumetur in cassum labor vester."『レビ記』二六―二十「それゆえ、あなたたちの努力はむなしく」(*Kronika Wincentego*. (ibid.) "incassum labor impensus est."『ヴィンセンティの年代記』第二巻「労苦が無益に費された」。
- 6) [M] Iob, 11-12 "vir vanus in superbiam erigitur."『ヨブ記』一一―一二「空虚な人は傲り高ぶり」(〔訳注〕ウルガータ聖書の本文にはこのようにあり、現行の合同訳聖書と相異している。)
- 7) [P] 年代記作者はボレスワフ・クシヴウスティをこのように呼んでいる。
- 8) [B] ズビグニエフを指す。1073年に生れる。ウァディスワフ・ヘルマンと、おそらくボモジェの非キリスト教徒の君主の娘との間に生れた子供。この結婚は、グンプロヴィッチによれば、その君主の娘が異教徒であったために、作者ガルにおいては不法のものとならされている。しかしウァディスワフ・ヘルマンの多くの文書とそれに関連する文書は、ヘルマンがズビグニエフを最年長の正統な息子と見なしていたことを示している。二人の兄弟の対立はここから第三巻の終章に至るまで続いていく。Gumplowicz. *Zur Geschichte Polens*. Innsbruck 1898.
- 9) [P] 作者は、『聖書』と呼ばず、このように『起源の書』と呼んでいるが、それはフラウィウス・ヨゼフの『古代ユダヤ史』であり、六世紀にラテン語に翻訳され、中世全体を通じて非常によく読まれた歴史書である。
- 10) [P] 『創世記』二五―二七、『ガラテヤの信徒への手紙』四一―四三。〔訳注〕『ガラテヤの信徒への手紙』のこの箇所は次のようである。「女奴隷とその子を追いつせ。女奴隷から生まれた子は、断じて自由な身の女から生まれた子と一緒に相続人になつてはならないから。」

第四章

さて、ウァディスワフ公の妾の子ズビグニエフは¹⁾、すでに成人になっていたが、クラコフの都市で学問に身を献げた²⁾。さらに義母は、彼の教育のためにサクソニアの女子修道院に彼を送った³⁾。当時、シェチェフという者が宮中伯であった⁴⁾。彼は確かに明敏な人物であり、生れも高貴で、姿形も美しかった。しかし貪欲のあまり物が見えなくなり⁵⁾、残酷で耐えがたい多くのことを行つた。すなわち、ある者を取るに足らない理由で売り飛ばし、またある者を祖国から追放し、無名の者を貴族に取り立てたのである⁶⁾。

かくて、多くの者、己の意志によりて逃げ失せり。

そは強いられたるにあらず、

咎もなきに苦しみを受けることを恐れたれば。

されば逃げ失せし者、邑々を巡り歩くこととなりぬ⁷⁾。

今や、彼らはブジェチスワフ公の勧めによってボヘミアへ集結した⁸⁾。そし

てボヘミア人の狡猾な策によって、金で二・三の者を雇い、彼らを用いて秘かにズビグニエフを僧院から連れ出した。こうして逃亡者達は、ボヘミアでズビグニエフを受け入れ、マグヌスというヴロツワフの伯に使者を派遣し⁹⁾、以下の言葉を伝えた。「マグヌス伯よ、我々は追放の身にあって辛うじてシェチェフによる侮辱に耐えている。しかしマグヌスよ、あなたにとっては、公という名称は¹⁰⁾、名誉でなく、恥辱を意味しているのではないか¹¹⁾。我々は涙ながらにあなたを哀れと思う。というのは、あなたは名誉の重荷を負ってはいるが、名誉そのものは一つも持っていないから。なぜなら、あなたは、シェチェフの任じた代官^{フリスタルデン}¹²⁾を敢えて自分の下に置こうとしていないからである。しかしもしあなたが隷属の軛を首から振り払おうと思うならば、我等が陣の中にいる少年を、あなたの盾の守りの下に急いで受け入れ給え」。しかし、これらのことは、すべてボヘミア公が示唆した事柄であった。というのは、ボヘミア公は喜んでポーランド人の間に不和の種を播こうとしたからである¹³⁾。マグヌスはこれを聞いて、はじめのうちはしばらく躊躇していたが、有力者の間で協議してその賛同を得て¹⁴⁾、ズビグニエフを受け入れたのであった。

この一件、彼の父ウァディスワフを暗澹とさせたり、

しかしてシェチェフ、王妃とともにさらに激しく狼狽せり¹⁵⁾。

そこで人々は、マグヌスとヴロツワフ地方の大貴族達^{マグナートス}に使者を送り、父の命令なしに逃亡者ともどもズビグニエフを受け入れたことが何を意味するか、また、自ら反乱者となるのか、それともウァディスワフに臣従することを望むのか、と尋ねた。これに対してヴロツワフの人々は異口同音に応えた。「我々は祖国をボヘミアに、あるいは又別の国に引き渡したのではなく、公の息子を君主として受け入れ、また他ならぬ自国の逃亡者を受け入れたのであり、我々は公に従い、また嫡子ボレスワフに対しても、あらゆることを通じて、あらゆることにおいて忠実に従うつもりでいる。しかしながら、シェチェフと彼の悪業に対しては、あらゆる方策を講じて反対する覚悟である」と。他方、民衆は、使節がシェチェフの一派を虚偽の言い逃れで弁護したので、彼を石で打ち殺そうとした¹⁶⁾。

かくしてウァディスワフ、大いに憤り、

シェチェフの心、甚だしく怒りに燃えて¹⁷⁾

ヴロツワフ人を討つべく、ハンガリア王ウァディスワフとボヘミア公ブジェチスワフに援軍を求めた¹⁸⁾。しかしそこからは、名誉や利益よりもむしろ、恥辱と災難がもたらされた。というのは、ハンガリア王ウァディスワフは、もしシェチェフが首尾よく小さなボレスワフを連れて逃げ失せなかったならば、自らシェチェフを打ち破り、自分とともに彼をハンガリアへ連れていったであろうから¹⁹⁾。また、ヴロツワフ人に対して、力尽くでは何事も達成できなかったであろう。なぜなら、味方同士の戦は誰も望まなかったからである。そこで父親は、自分の意に反して息子と和を結び、その時はじめてズビグニエフを自分の息子と呼んだのである²⁰⁾。

その間、シェチェフは、逃亡していたポルスカから帰還し²¹⁾、有力者を約束事と贈物とで狡猾に唆し²²⁾、徐々に彼らを自分の陣営に転じさせた。さて、結局、ウァディスワフは、ヴロツワフの町へ軍を進め²³⁾、その都市も自分に返還させ、近隣の土地とともに占領した。一方、ズビグニエフは、内外の有力者が自分から離れたことを知り、刺に逆えば厄介なことになると覺り、民の支持や騎士の忠誠や自分自身の生命も覚束無くなると思って²⁴⁾、暗闇にまぎれて逃げていった。そして多くの騎士に溢れていたクルシヴィッツアの城に赴き²⁵⁾、町の人々に受け入れられ入城したのであった。

(4)

Igitur Zbigneuus a Wladislauo duce de concubina progenitus¹⁾: in Cracouiensi civitate: adultus iam etate: litteris datus fuit²⁾: eumque noverca sua in Saxoniam docendum monasterio monialium transmandavit.³⁾: Eo tempore Setheus palatinus comes⁴⁾ vir quidem sapiens, nobilis et formosus erat,: sed avaricia exacecatus⁵⁾ multa crudelia et inportabilia exercebat.: Alios scilicet vili occasione transvendebat,: alios de patria propellebat,: ignobiles vero nobilibus preponebat⁶⁾:

Unde multi sua sponte non coacti fugiebant
Quia idem sese pati sine culpa metuebant
Sed, qui prius fugitivi per diversa vagabantur⁷⁾

Brethizlauri ducis consilio in Bohemia congregantur⁸⁾ : Sicque Bohemorum calliditate quosdam precio conduxerunt, : qui Zbigneum furtim de clauastro monialium extraxerunt : Recepto igitur Zbigneuo in Bohemia fugitivi legationem in hec verba comiti mittunt nomine Magno⁹⁾ Wrotislauri . Nos quidem, comes Magne, quoquomodo Zethei contumelias in exilio positi toleramus, : sed tibi Magne, cui nomen ducatus¹⁰⁾ est plus dedecoris¹¹⁾ quam honoris lacrimabiliter condolemus, : cum laborem honoris nec honorem habeas, : cum pristaldis¹²⁾ Zethei dominari non audeas, : sed si iugum servitutis de cervice volueris excutere, : festina puerum, quem habemus, in clipeum defensionis recipere. : Et hoc totum dux Bohemicus suggerebat, : qui libenter discordiam inter Polonos seminabat¹³⁾ : Hoc audito Magnus diu imprimis hesitavit : sed communicato consilio¹⁴⁾ maioribus et laudato, verbis eorum eum recipiens acquieuit. :

Pro quo facto Wladislaus pater eius contristatur,

Sed Zetheus cum regina multo magis conturbatur¹⁵⁾

Igitur legatum Magno Wrotislauris et magnatibus regionis transmissum sciscitantes, quid hoc esset, quod Zbigneum cum fugitivis sine patris imperio recepissent, : si rebelles existere, : vel obedire : sibi vellent : Ad hec Wrotislaurienses unanimiter responderunt, non se patriam Bohemicis vel alienis nationibus tradidisse, : sed dominum ducis filium suosque fugitivos recepisse, seseque velle domino duci legitimoque filio suo Bolezlauo in omnibus et per omnia fideliter obedire, : sed Setheo suisque malis operibus modis omnibus contraire. : Populus autem legatum lapidare volebat¹⁶⁾ : quia Sethei partes falsis ambagibus defendebat. :

Unde multum Wladislaus

Indignatus et Setheus

Ira nimis inflammatus¹⁷⁾

Wladislaum Vngarie regem et Brethizlaum Bohemie ducem : in auxilium sibi contra Wrotislaurienses mandaverunt¹⁸⁾ : unde plus dedecoris et dampni : quam honoris et proficui : habuerunt . Nam Setheum rex Wladislaus vinctum secum in Vngariam transportasset, : ni pro salute cum parvulo Bolezlauo transfugisset¹⁹⁾ . Cumque nichil virtute contra Wrotislaurienses proficere potuissent, : quia sui contra suos bellum gerere

noluisse, : pacem invitus cum filio pater fecit, : eumque tunc primum suum filium appellavit²⁰⁾ : Reversus interim de Polonia³¹⁾ quo fugerat Setheus maiores inter eos callide promissis et muneribus attemptabat²²⁾ : eosque paulatim in partem aliam inflectebat. : Ad extremum vero pluribus inflexis cum exercitu dux Wladislaus ad urbem Wratislaviensem accedebat²³⁾ : iamque castra sibi reddita per circuitum obtinebat. : Zbigneus vero videns sibi procures intus et extra defecisse, : durum intellegens se contra stimulum calcitrare : vulgi fidei, viteque sue diffidens²⁴⁾ de nocte fugit, : fugiensque castrum Crusiecz²⁵⁾ militibus opulentum ab oppidanis receptus introivit.

- 1) [P] ウァディスワフ・ヘルマンの年上の息子ズビグニエフ（ほぼ1073年ごろに生れる）については、R・グロデツキのすばらしい論文「ポーランド公ズビグニエフ」[Zbigniew książę polski, in *Studia staropolskie, księga ku czci A. Brücknera*, kraków 1928, p. 71-105. 参照のこと。現在の学者達の一致した見解によれば、彼の母（ブラウジツ族の出身）は、ウァディスワフ・ヘルマンの正当な妻であった。その結婚は、スラヴ人の慣習に従って行われたものであり、教会法に従ったものではなかったが、教会法は、当時まだ結婚の正当性を保証するものではなかった。
[訳注] グロデツキ論文によれば、ズビグニエフの母の部族は紋章学の研究によって、ポモジャ人と深い関係を持っていた、とされる。またT・ヴォイチェホフスキの説によれば、ズビグニエフの母の家系は、ボレスワフ・クシヴウスティが四肢切断の極刑を課した聖スタニスワフの家系と繋がっているとされる。もしそうだとすれば、ズビグニエフとボレスワフ・クシヴウスティとの兄弟間対立は、ポモジェ攻略および聖スタニスワフ殺害と深く関連し、ポーランドの内外をゆるがす大きな政治、宗教問題を内に孕んでいたというべきであろう。Balzer, *Genealogia* p. 107, 118. Tyc. *Zbigniew*. Maleczyński, *Bolesław Krzywousty*, p. 11. *Cosmas* III. 16. T. Wojciechowski, *Szkice historyczne jedenastego wieku*. Kraków 1950. p. 267.
- 2) [P] これはクラコフの学校存在を示す最古の言及である。"adaltus iam etate."
「成年において」—成人になる年は、当時は今日よりも著しく低い。ズビグニエフはおそらくやっと十数才になるかならぬかの年であったと思われる。
[M] おそらく十二才を過ぎた頃であっただろう。それはボレスワフ・クシヴウスティの生年の頃（1089/90年）であった。
- 3) [M] 1089年から90年の頃。Grodecki, *Zbigniew*. P 77. Maleczynski, *Bolesław Krzywousty*, p. 11. この修道院はクフエドリンプルグ Quedlinburg にあった。当時ユデット・マリア（ヘルマンの妻—ズビグニエフの義母—筆者）の妹が修道院の院長に就いていた。ズビグニエフはその時、確かに聖職者として聖別された。
- 4) [G] "palatinus comes" 「パラティヌス・コメス」は、当時の最高位の官職であった。その主な権限は、公の宮廷の管理、監督、とりわけ財務の管理であった。さらにこの宮廷に対する裁判上の監督権を持っていた。というのは、公の身の安全に対して責任を有していたからである。さらに彼は首都（グニエズノ）の城代（カシテラン）であった。さらに彼は同時にグニエズノの騎士に対する命令権を持っていた。また公

- の名において、全軍を統率することができた。
- 5) [M] Sallust, *Bellum Iugurthinum*. 80-5. "Pauci impediverant caeci avaritia." サルスティウス『ユグルタ戦記』八〇—五「わずかな者達は、貪欲に目がくらみ」。
 - 6) [訳注] グロデツキによれば、シェチェフの統治は、ズビグニエフの母方の部族やそれに連なる一族達の反抗を引き起こしたという。シェチェフは彼らを抑圧するために、厳しい施策を用いたが、とりわけ、下層の人々を大胆に登用し旧い家柄の者達を多数追放の刑に処した。このため、非常に多くの亡命者が生じた。彼らの多くは、とくにチェコに流入したという。Grodecki, *Zbigniew*. p. 81. Tyc, *Zbigniew* p. 10. Maleczyński, *Bolesław Krzywousty*. p. 8. p. 16.
 - 7) [M] 六連の八音節トロカイックの詩。
 - 8) [P] Brzetysław ブジェチスワフ。チェコ公、ヴラティスワフ王の息子。存位1092年から1100年。
 - 9) [P] このマグヌスという人物については、ポワウィ族 Powaly の出であるとする者もいれば、トゥジニツィ Turzynity 族の出とする者もある（トゥジニツィ族は、おそらく聖スタニスワフの一族である）。一般的に、彼は第二巻第四章で言及されている、1109年のマゾフシェ公と同一の人物とみなされている。
 - 10) [P] 公という名称—もし、これを文字どおりに解すれば、シロンスクの伯は公の名称を持っていた、ということにならざるを得ない。後にこのシロンスク公国を、ボレスワフ・クシヴウスティが父の名において統治した（第十三章参照）。
 - 11) [M] Sallust, *Bellum Iugurthinum*. 31-1. "plus periculi quam honoris est." サルスティウス『ユグルタ戦記』三一—一「名誉よりもむしろ危険なもの」。
 - 12) [P] "przystaw"はプリスタルディ pristaldi というラテン語に対応する古ポーランド語である。この官職名はハンガリア地方において知られており、裁判官を意味している。年代記作者は、ここでは、領主 wojewód に直接従属する官吏であって、領主の統治機構の一部を構成する役人を念頭においている。
 - 13) [M] Prov. 6-19. "qui seminat inter fratres discordia." 『箴言』六—一九「兄弟の間にいさかいを起こさせる者」。
 - 14) [M] Sallust, *Bellum Catilinae*. 18-5. "cum hoc Catilina et Autronius...consilio communicato" サルスティウス『カティリナ戦記』一八—五「カティリナとアウトロニウスはこれを…協議して」。
 - 15) [P] 年代記作者は、ヴァディスワフ・ヘルマンの妻ユデット・マリアを、このように常に「王妃」と呼んでいる。おそらく、彼女の以前の夫ソロモン王（ハンガリア王）との関係を示唆しているのであろう。
[M] 四連の八音節トロカイックの詩。
 - 16) [訳注] ズビグニエフの受け入れについては、見解が分かれている。St. ザグジェフスキによれば、受け入れに積極的であったのは、プロスワフを中心とするシロンスクの大貴族層であり、下層の騎士階級・都市市民は、むしろ宮廷伯シェチェフの側に立っていたとする。他方、グロデツキ、マレチンスキは、大貴族も下層騎士層、都市市民もズビグニエフ受け入れに賛同したという。St. Zakrzewski. *Okres do schyłku XII w. in Enyklopedya Polska. Historia Polityczna Polski, Wiek średnie*. 1920. p.80. 88. Grodecki *Zbigniew* 6. 82. Maleczyński, *Bolesław Krzywousty* : p. 18.
 - 17) [B] 三連の八音節トロカイック詩。
 - 18) [P] この章のはじめのところで、ズビグニエフとシロンスクの反乱者はチェコ公ブジェチスワフの支持をあてにしていたと書かれているので、これまで、くりかえし、

次のような解釈がなされてきた。すなわち、ワァディスワフ・ヘルマンは、ブジェチスワフとズビグニエフに対する戦いにハンガリア王ワァディスワフの援軍を要請した、と。事実、事態はこのようであったが、年代記のテキストは、全く疑いようもなく明らかにブジェチスワフにも援軍を要請したと表現されている。

〔訳注〕マレチンスキによれば、ヘルマンは、支払いを滞らせていたシロンスク地方の貢納金をブジェチスワフに支払うことで、彼の援助を確保した、という。この指摘を示唆する資料は『コスマの年代記』第三巻——である。「ブジェチスワフは、1093年の主の復活祭の頃、彼の最初の統治の年に、しばしばポーランドに侵入し、大いなる勝利を収めて帰還した。その侵入による土地の荒廃は極めて大きなものであったので、オドラ川のこちら側の土地は、リチンの砦から、ニエムチャの一つの砦をのぞいてグローゴフの砦までは、一人の人間も住まない土地となった。しかし、この荒廃も、ポーランド公ワァディスワフが、大きな嘆願書を添えて、以前と今年の貢納分を正確に一オボルまで支払うまでは、止むことがなかった。"Hic quocienscunque Poloniam invasit, semper cum magno triumpho remeavit. Quam utique anno dominicae incarnationis 1093, sui vero ducatus primo, ita crebris incursionibus demolitus est, ut ex ista parte fluminis Odrae a castro Recen usque ad urbem Glogov praeter solum Nemci oppidum, nullus habitaret hominum. Nec tamen cessavit ad eius vastacione, donec princeps Poloniae Wladizlaus cum magna supplicatione praeteriti et praesentis anni tributum usque ad unum solveret obulum." なお、ブジェチスワフのポーランド侵入の時期については、研究者により、1091年から94年までの間を動揺している。

- 19) [P] (ハンガリア王)ワァディスワフは、おそらくシェチェフを、自分で愛し育てたミエシコ（ボレスワフ・シミアウイの息子）殺害の犯人と考えたであろう。
- 20) [P] ここで正しく、次のことが示された。すなわち、ズビグニエフの出自の正統性について、いかに疑わしい点があったとしても、この瞬間からズビグニエフは、統治者である公の正統な長男となった。
- 21) [P] ヴィエルコポルスカ地方を指す。シェチェフはハンガリア王ワァディスワフから逃れてこの地方に身を隠していた。
- 22) [P] "majores inter eos"「彼らのうちの有力者」—ズビグニエフを支持するシロンスクの大貴族。
[M] Sallust, *Bellum Iugurthinum*. 80-3. "magnis muneribus et maioribus promissis ad studium sui perducit" サルスティウス『ユグルタ戦記』八〇—三「多くの贈物とさらに多くの約束で彼の好意を手に入れた」。
- 23) [M] グロデツキは、ズビグニエフにシロンスク州が与えられた。と主張している。
Grodecki, *Zbigniew*. p. 86.
- 24) [M] Sallust, *Bellum Catilinae*, 45-4. "postremo timidus ac vitae ditidens." サルスティウス『カテリナ戦記』四五—四「結局、恐れをいだき、生命すら覚束なく思っで」。
- 25) 〔訳注〕クルシヴィッツア Kruszwica。クヤーヴィ地方の古都でゴブウォ湖 Gopło, に面している。八世紀に城塞が置かれ、塩泉と交易で繁えた、ポビェール伝承の地であり、鼠の塔に擬せられた塔が今日まで残されている。

第五章

さて、父親は、ズビグニエフがこのように罰も受けずに逃亡し、またクルシヴィッツァの人々が自分に反抗して彼を受け入れたことに立腹し、以前と同じ数の軍勢を率いて逃亡したズビグニエフの後を追ひ、全軍とともにクルシヴィッツァの城塞の下に押し寄せた。しかしズビグニエフは、異教徒の大軍を集め、クルシヴィッツァの兵七部隊を率いて、城塞から出て父親と激しく闘った。しかし公正な裁き主が父親と息子の間を裁くこととなった²⁾。というのは、そこでは内乱を越える戦が行われ³⁾、父親に対して息子が、兄弟に対して兄弟が邪な武器を取ったからである⁴⁾。ここにおいて、哀れなズビグニエフは、父親を冒瀆したことによって、来るべきものに値する者となったと思われる⁵⁾。全能の神は、その場でヴァディスワフ公に多くの恵みを与えたので、公は数えきれない程多くの敵を打ち倒し、公自身は、わずかな兵を失っただけであった。そこでは非常に多くの流血があり、夥しい屍が城塞に隣接した湖の中に沈んだ⁶⁾。その時から善きキリスト教徒は誰もこの湖水の魚を忌みきらうこととなった。このようにして、以前は豊かで多くの兵に満ち溢れていたクルシヴィッツァは、ほとんど廃墟のような外観を呈するにいたった⁷⁾。

さて、わずかな手勢とともに難を遁れ、城塞に逃げ込んだズビグニエフは、生命を失うことになるのか、あるいはまた四肢のいずれかを失うことになるのか、と心中穏やかではなかった⁸⁾。しかし父親は、若者の愚かさを罰することなく、彼が異教徒や他国人に依存しているのではないか、またそのことからさらに大きな危険が生じるのではないか、との不安を退け、懇請された生命と四肢を保証し、彼をマゾフシェに連れて行き、シェチェフの城の牢獄の中にしばらくの間閉じ込めた⁹⁾。その後グニエズノの教会の聖別式の際に¹⁰⁾、司教達と諸侯達の執り成しによって、彼を呼びもどした。こうしてズビグニエフは彼らの懇願によって以前に失っていた寵を取り戻した。

(5)

At pater dolens eum inpune sic evasisse, eumque Crusuicienses contra se ipsum recepisse, : cum eodem exercitu Zbigneuum fugientem persequitur, : totisque viribus Crusuiciense castrum aggreditur. : Zbigneuus vero convocata multitudine paganorum¹⁾, : habensque VII acies Crusuiciensium, : exiens de castro cum patre dimicavit, : sed iustus iudex inter patrem et filium iudicavit²⁾. : Ibi namque bellum plus quam civile³⁾ factum fuit, : ubi filius adversus patrem : et frater contra fratrem : arma nefanda tulit⁴⁾. : Ibi spero, miser Zbigneuus paterna malediccione, quod futurum erat, promeruit ; ⁵⁾ : ibi vero Deus omnipotens Wladislauo duci misericordiam tantam fecit, : quod innumerabilem de hostibus multitudinem interfecit : et de suis sibi paucissimos mors ademit. : Tantum enim humani cruoris ibi sparsum fuit, : tantumque cadaverum in lacum castello contiguum corruit⁶⁾, : quod ex eo tempore piscem illius aque comedere quisque bonus christianus exhorruit. : Sicque Crusuicz, divitiis prius et militibus opulentum, : ad instar pene desolacionis est redactum⁷⁾. : Igitur Zbigneus in castrum fugiens cum paucissimis liberatus, : utrum vitam perdat an membrorum aliquid est incertus⁸⁾. : At pater, iuventutis stulticiam non ulciscens, ne paganis dubitans, vel alienis gentibus adhereret, : unde maius periculum immineret, : pro vite membrorumque salute quesita fide et concessa, secum illum in Mazouiam transportavit, : eumque carcere in castro Sethei⁹⁾ aliquanto tempore maceravit. : Postea vero in consecratione Gneznensis ecclesie¹⁰⁾ interventu episcoporum eum et principum advocavit, : eorumque precibus gratiam, quam perdiderat, acquisivit. :

1) [P] おそらくポモジャ人であろう。

2) [M] Psalmi 7-12 "Deus justus iudex, fortis et patiens." 『詩編』 7-12 「力強く、堅固な、正しき裁きの神」。

3) [M] Lucanus, *De bello civili (Pharsalia)* 1-1, "Bella per Emathios plus quam civilia campos" ルカーヌス『内乱（ファルサリア）』 1-1 「エマティアの野で、内乱を越えた戦が」。ズビグニエフとの戦は1096年に行われた。

4) [訳注] グロデツキの見解は、宮廷伯シェチェフこそ、この争いの元凶であり、またヘルマンに対抗するズビグニエフを支援するクヤーヴィの在地勢力こそポモジェ人と

- の同盟を画策した張本人である、というものである。Grodecki, *Zbigniew*, p87.
- 5) [P] "quod futurum erat." ズビグニエフの失明と彼の死を示唆している。
 - 6) [P] ゴブウァ湖 Gopla.
 - 7) [M] *Isaias*, 34-11". et redigatur…… in desolationem" 『イザヤ書』34-11「荒廃の中に……もどす」。
 - 8) [P] 「生命の喪失あるいは四肢の切断」—— これはこの時代によく見られた刑罰であり、反抗者、裏切り者として扱われた政治犯に適用された。
 - 9) [P] ヴィスワ川に面した、コジェニッツ近郊のシェチェホフ Siechiechów。
[B] この城でのズビグニエフの拘留は、1096年の夏から1097年の5月1日まで。
 - 10) [訳注] ドゥーゴシの年代記の第4巻の1097年の項に次のようにある。「大司教マルチンは、グニエズノの大司教座聖堂の聖別式の挙行の日について悩み、それを5月1日まで延期することを決意した。そしてその式をより壮麗にするために、ポーランド公ヴァディスワフ、公妃ソフィア、ヴァディスワフの息子ボレスワフとポーランド王国のほとんどすべての司教と大貴族、封臣を招き、その臨席によって式をより壮大なものにしようとした。……グニエズノの教会の聖別式が神の祝福の下に無事に終わった時、ポーランド公ヴァディスワフは、この式典に参列したグニエズノの大司教マルチンや司教達、封臣達の度重なる懇請を受け入れ、ズビグニエフを牢獄から解放した。彼は、父とその権力に今後の忠誠を誓った。そしてもう1人の息子ともども、大きな軍勢を与えてポモジャに派遣した。"Gneznensis ecclesie Polonorum metropolis Martinus eiusdem archiepiscopus dilatam consecracionem in eam diem molestius ferens, ad dedicandam eam primam diem Maii constituit. Que quo celebrior esset, Wladislaum Polonorum ducem et Zophiam ducissam, Boleslaum quoque filium Wladislai et fere universos Polonie episcopos proceresque, barones et primos Regni Polonie, ut eam sua honorarent presencia, ad illam invitavit.…… dedicationis ecclesie Gneznensis benediccione absoluta Wladislaus Polonorum dux Martini Gneznensis archiepiscopi singulorumque episcoporum et baronum Polonie, qui solennitati huiusmodi intererant, multiphariis precibus expugnatus, Sbigneum de carcere, devotum se de cetero patri et in eius potestate futurum pollicentem, relaxat et utrumque filium, dato illis frequenti, exercitu, in Pomeraniam transmittit" (Warszawa 1970, *Annales seu Cronicae incliti regni Poloniae*, P 193-195.)

第六章

二
一
九

ここでたまたまグニエズノの教会が言及されたので、この教会の聖別式の前夜に¹⁾尊い殉教者アダルベルト²⁾が異教徒にもまたキリスト教徒にも顕した奇跡について³⁾、黙したままやり過ごすのは適切なことではないであろう⁴⁾。すなわち、その夜、ポーランド側の砦では、裏切り者数名が綱でポモジャ人

を上に取り上げ、こうして砦に入った者が翌日、堡塁の上で砦の者達の破滅を待ち受けるという手筈が整えられていた。しかし常に見張り、決して眠らない者が⁵⁾、自ら御自身の騎士アダルベルトの見張りをういて、眠っている砦の兵達を守り、キリスト教徒を待伏せして見張っていた異教徒達を霊的な武器によって、恐怖におとし入れたのである。というのは、白馬に乗り、武器を帯びた者がポモジャ人の前に現われ、剣を抜いて彼らを脅し、城塞の階段と砦の土塁から彼らを突き落したからである。こうして砦の者達は、異教徒の叫び声と騒乱の音に目を覚めた。彼らはまさに栄光に輝く殉教者アダルベルトの守護によって、明らかに差し迫っていた死の危険から免れたのであった。

目下のところ、聖人については以上述べたことで十分であろう。そしてこの中断の後では、我が筆を当初の話の筋道に戻そうと思う。

(6) MIRACULUM DE SANCTO ADALBERTO

Et quoniam ecclesie mencio Gneznensis in hoc fieri forte contigerit, : non est dignum preterire⁴⁾ miraculum, quod in vigilia dedicacionis¹⁾ preciosus martir Adalbertus²⁾ et paganis et christianis ostenderit³⁾. : Accidit autem eadem nocte in quoddam castrum Polonorum quosdam traditores eiusdem castri Pomoranos sursum funibus recepisce, : eosque receptos in propugnaculis diem crastinum ad oppidanorum perniciem expectasse. : Sed ille, qui semper vigilat, nunquam dormitabit⁵⁾ : oppidanos dormientes sui militis Adalberti vigilantia custodivit : et paganos in insidiis christianorum vigilantes armorum terror spiritualium agitavit. : Apparuit namque quidam super album equum Pomoranis armatus, qui gladio eos extracto territabat, : eosque per gradus et solium castri precipites agitabat. : Sicque procul dubio castellani, : clamoribus paganorum et tumultibus excitati, : defensione gloriosi martiris Adalberti ab imminente sunt mortis periculo liberati. : Hec ad presens de sancto dixisse sufficiat : et ad intervallum superius nostre stilus intentionis incipiat. :

- 1) [M] 1097年4月30日。
- 2) [P] 聖アダルベルト(聖ヴォィチェフとも呼ばれる)はグニエズノの大司教座と聖堂の守護者である。
- 3) [訳注] マレチンスキによると、ポモジャ人はこの時、バルト川とノテツ川の線まで攻めて来て、その線上のポーランドの砦を急襲した、という。
- 4) [M] Sallust, *Bellum Iugurthinum* 79-1 "non indignum videtur egregium atque mirabile facinus……memorare. サルスティウス『ユグルタ戦記』79-1「すぐれた、驚くべき行為を述べることは、不適切なことではない」。
- 5) [M] Psalmi, 120-4 "non dormitabit……qui custodiet Israhel."『詩編』120-4「イスラエルを見守る者は……眠らず」。

第七章 二人の息子への王国の分割について

さて、グニエズノの聖堂が聖別され、ズビグニエフが父親の寵を得たあと¹⁾、ウァディスワフ公は、自分の軍隊を二人の息子に任せ、ポモジャ地方の征服に彼らを派遣した。彼らは確かに出陣したのであるが、どういうわけか、彼らの間である決定を下し、任務を果たさずに帰還した。これに対して、幾分疑いを抱いた父親は、ただちに二人の間に王国を分割した²⁾。しかし

しかしながら、王国の要たる

都邑³⁾は手放さずして我が手に⁴⁾、

しかし分割の際に、どこがどちらの側に振り分けられたか⁵⁾、を挙げることは、我々にとっては荷が重く煩わしいことであり、あなたがたにとっては、これを聞くことは十分に実りあることでもないであろう。

(7) DE DIVISIONE REGNI INTER UTRUMQUE FILIUM

二
一
七 Igitur Gneznensi basilica consecrata : et Zbigneuo gratia patris
impetrata¹⁾, : Wladislauus dux ambobus filiis suum exercitum
commendavit : et in Pomoraniam eos in expeditionem delegavit. : Illi
autem abeuntes : et quale nescio consilium capientes, : imperfecto negotio
ex itinere redierunt. : Unde pater, nescio quid suspicans, confestim inter
eos regnum divisit²⁾, : sed de manu

Tamen sua sedes regni principales³⁾ non dimisit⁴⁾.

Sed quid in divisione cuique contigerit⁹⁾, : enumerare nobis inminet onerosum, : neque multum hoc audire vobis fuerit fructuosum. :

- 1) [M] この時からズビグニエフはヴィエルコポルスカと、おそらくはクヤーヴィ地方も領有した。それに対してボレスワフはシロンスクを領有した。
- 2) [訳注] 『コスマの年代記』第3巻第16章に次のようにある。「キリスト降誕1102年。ポーランド公ウァディスワフには二人の息子があった。1人は妻から生れ、名をズビグニエフといった。もう1人はヴラディスワフ王の娘ユデットから生れ、名をボレスワフといった。ヘルマンは自分の王国を彼らに対して半分づつ分割した。しかし、神の声にもあるとおり、自らの内部で分かたれたすべての王国は荒廃するであろう。」
"Anno dominicae incarnationis 1102. Wladislaus dux Poloniae habens duos filios, unum de concubina progenitum, nomine Sbignev, alterum ex Iuditha Wratizlai regis filia editum, nomine Bolezlaum, hos inter suum regnum dividit per medium ; sed quoniam iuxta vocem dominicam, omne regnum in se ipsum divisum desolabitur". *Cosmae Chron.* Lib. III 16. この王国分割の行われた時については、諸説がありグロデツキは1098年か1097年、ザグジェフスキは1098年、マレチンスキは1099年と考えている。Grodecki *Zbigniew*, p 88. Zakrzewski, *Okres do schyłku* p 81, Maleczyński, *Bolesław Krzywousty* p 21.
- 3) [P] 次の章から明らかなように、ヴロツワフ、クラコフ、サンドミエシ。
- 4) [M] 二連の八音節トロカイックの詩。
- 5) [訳注] グロデツキによれば、ズビグニエフはクヤーヴィ地方を含むヴィエルコポルスカ地方、それに加えて、ウェンツィツア、シェラツキ地方を領有し、ボレスワフはルブシ地方を含むシロンスク地方、クラコフ地方、サンドミエシ地方を領有した、とされる。さらにグロデツキは、ヘルマン没後のマゾフシェ地方はズビグニエフに帰属し、自分の領地とマゾフシェの領地の軍事命令権をも獲得した、とし、ズビグニエフにボレスワフに対する優越した地位を帰している。Grodecki, *Zbigniew* p 90. 他方、マレチンスキは、『コスマの年代記』の記述にも依りながら、2人の兄弟間の地位は対等のものであったとし、この分割はシェチェフの陰謀であったと推論している。Maleczyński, *Bolesław Krzywousty* p 25.

第八章

さて、父親は、諸侯達から、使節の派遣や接受、軍隊の召集や指揮¹⁾、またこのように広大な王国の多様な統治に、二人の息子のうち、どちらが高い地位を占めるべきかと尋ねられた時、次のように答えたといわれている。「王国を彼らの間に分割し、目の前にあるものに裁きを下すことならば、病弱で年老いた身の私でもできることである。しかし、一方の者を他方の者の上に置

き、彼らに勇気と知恵を与えることは、
 そは我が為しうることにあらず、
 神の権能に属することなり²⁾。

しかし、私の一つの心からの願い³⁾をあなたがたに明らかにすることはできない。すなわち私の死後、国土の守りと敵との戦においてより大きな分別と勇気を持つ者に⁴⁾、心を一つにして従うように。他方、二人の子供達の間には王国を分割したように、あなたがたもまた、誰でも自分の領地を保持できる。そして私の死後、スビグニエフは、今領有しているものに加えて⁵⁾同時にマゾフシェも領有することになるだろう。他方嫡子ボレスワフには、ヴロツワフ、クラコフ、サンドミエシ⁶⁾という王国の主要な都市を得させるであろう。最後に、もし二人に勇気がなく、あるいはもしたまま不和が生じたならば、また彼らが外国の民に支持を求め、外国の民を王国の破壊のために引き入れる者となれば、彼らから統治の権を剥奪し、家産の権利を奪ってもらいたい⁷⁾。他方、以前にもまして国土の名誉と利益に配慮した者には、永続的な法によって王座を得させてもらいたい。」

こうしてウァディスワフは、王国を上述の如く分割し、父親としての立派な言葉を残したが⁸⁾、その後、少年達は各々、自分に与えられた領土に赴いた。他方、彼らの父は、常に喜ばしい気持でマゾフシェに移り住んだのであった。

(8)

Interrogatus autem pater a principibus, quis eorum excellencius emerit et in legacionibus mittendis et suscipiendis, in exercitu convocando et conducendo¹⁾ et in tanti regni dispensacione multimoda, sic respondisse fertur : Meum quidem est, ut hominis senis et infirmi, regnum inter eos dividere, : ac de presentibus iudicare, : sed alterum alteri prerogare vel probitatem et sapientiam eis dare, :

Non est mee facultatis, : sed divine potestatis²⁾.

Hoc autem unum cordis mei desiderium³⁾ vobis possum aperire, : quod discreciori ac probiori in terre defensione : et hostium inpugnacione : volo vos omnes post mortem meam unanimiter obedire. : Interim vero, sicut divisum eis regnum partem suam quisque retineat. : Post obitum

quidem meum Zbigneus cum hoc, quod habet⁵⁾, Mazouiam simul habeat, :
Bolezlauus vero, legitimus filius meus, in Wratislaw et in Cracou et in
Sudomir⁶⁾ sedes regni principales obtineat. : Ad extremum autem, si
ambo probi non fuerint, : vel si forte discordiam habuerint, : ille qui
exteris nationibus adhererit : et eas in regni destruccionem induxerit, :
privatus regno patrimonii iure careat⁷⁾. : ille vero solium regni lege
perhenni possideat, : qui honori terre melius et utilitati provideat : Facta
autem, ut dictum est, regni divisione, : habitaque patris luculenta satis
oratione, : puerorum quisque suam regni porcionem visitavit, : eorum
vero pater semper in sua Mazouia libentius habitavit. :

- 1) [P] “conducendo [exercitu]”ーグロデツキは「軍隊を指揮すること」と訳した。
もちろんこうした訳も可能であるが、もっともよく用いられる意味は「傭兵を徴募す
ること」である。もしこうした解釈がここで可能ならば、ポーランドの諸公はすでに
十一世紀から十二世紀にかけて、すでに傭兵軍を持っていたこととなる。
- 2) [M] 二連の八音節トロカイックの詩。
- 3) [M] Psalmi 80-13 “dimis illos secundum desideria cordis eorum”『詩編』（ウル
ガータ版）八〇——三「彼らの心からの望みに従って彼らを解き放ち」（〔訳注〕現在
の『合同訳聖書』ではこの文章は八一章に置かれており、意味も多少異なっている。
「彼らの心の頑なさの故に」“אֲנִי מִן־הַבְּרִיָּה”。
- 4) [P] 年代記作者がウァディスワフ・ヘルマンの言葉としたこの表現は、死の床にあ
ったアレクサンダー大王の応答を想起させる。彼は、王国を誰に遺すのか、と尋ねら
れて「最も勇気ある者に」と答えたといわれている。
- 5) [訳注] グロデツキによれば、ヴィエルコポルス地方、クヤーヴィ地方およびウェ
ンツィツィ地方、シェラツキ地方である。
- 6) [訳注] サン川がヴィスワ川に注ぐ地点に位置している。
- 7) [P] 明らかに一一〇九年にズビグニエフが果たした役割を示唆している。
- 8) [M] Sallust, *Bellum Catilinae* 31-6. “orationem habuit luculentam atque
utilem rei publicae,” サルスティウス『カティリナ戦記』三一—六「国にとって有
用なすばらしい演説をした」。グロデツキによれば、このヘルマンの言葉は年代記作
者による虚構である。

第九章

さて、もしも我々がボレスワフの少年時代について、記憶に値すべきもの
を書き記したとしても、誰もそれ程には怪しまないであろう。というのは、

ボレスワフは、少年の気まぐれがしばしば求めるような無益な娯楽に心を奪われず、少年の身に可能な限り力強い騎士の業を真似ようと努めたからである。犬や馬と戯ることが、貴族の子供達の慣わしであったが、ボレスワフはむしろ、少年の身でありながら、騎士の戦の業を喜ぶのが習いとなった。まだ自分の力で馬に乗ったり、降りたりすることはできなかったが、父親の意志に逆らって、あるいは父親も知らずに二度三度と騎士達の司令官として敵を追って出征したのである。

(9)

Interim ne sit alicui aliquatenus admirandum, : si quid scripserimus de Bolezlaui puericia memorandum. : Non enim, sicut assolet plerumque lascivia puerilis, ludos inanes sectabatur, : sed imitari strennuos actus ac militares, in quantum puer poterat, nitebatur. : Et quamvis sit puerorum nobilium in canibus et in volucris delectari, : plus tamen solebat Bolezlaus adhuc puerulus in milicia gratulari. : Nondum enim equum ascendere vel descendere suis viribus prevalebat et iam invito patre vel aliquotiens nesciente, super hostes in expeditionem dux militie precedebat. :

第十章 シェチェフとボレスワフ、モラヴィアを寇掠す

さて、今、少年騎士ボレスワフの初期の物語について述べようと思う。そして徐々に小さな事柄から大きな事柄へ移っていくこととしよう。

二
一
三

以前に述べたように、老令という重荷を負ったウァディスワフ公は、宮中伯シェチェフに自分の軍隊を任せ、敵と戦を行うために、また敵の土地を寇掠するために彼を派遣した。さて、シェチェフがモラヴィアへ侵攻しようとした時、少年ボレスワフも名目的に戦に加わるべく出征した。その戦では、ポーランド人達はモラヴィアの大部分を荒廃させ、またそこから多くの戦利品とともに多くの捕虜を連れ帰った。また、戦場においても行軍の道々にお

いても全く苦境に会わずに帰還したのであった²⁾。

(10) ZECZECH ET BOLEZLAUS MORAUIAM VASTAVERUNT

Nunc vero quoddam eius initium puerilis militie depingamus : et sic paulatim de minoribus ad maiora transcendamus. : Sicut notum est, dux Wladislauus, senio gravis et etate, Setheo palatino comiti suum exercitum committebat¹⁾ : eumque pugnaturum : vel terras hostium vastaturum : delegabat : Unde cum esset Morauiam invasurus, : iuit eum eo puerulus solo nomine pugnaturus. : Illa vice partem Moraue maximam destruxerunt, : indeque predam multam et captivos adduxerunt, : ac sine belli discrimine vel itineris redierunt²⁾ :

- 1) [訳注] “palatinus comes” — とりあえず「宮中伯」と訳しておいた。バルゼルによれば、この宮中伯は官吏の任命権を持ち、軍隊の司令権を掌握していた。プレジィアによれば、十一世から十二世紀にかけてのポーランドにおいては、この宮中伯は王または公に次ぐ顯職であった。O. Balzer, “Przegląd palatynów polskich za panowania Piastów” in *Pisma pośmiertne*, t. III, Lwów 1937, p. 229-242.

- 2) [P] モラヴィアへのこの出征は、一〇九二年あるいは一〇九三年に行われた。

第十一章 少年ボレスワフ、猪を刺し殺す

もし時が、作品の要点へ急ぐことを命じなければ、この少年の勇気について多くのことを述べることができるのだが。

しかしながら、ある一件は秘密のままに隠し置く能はず、

そは、勇気の範として

赤く輝くに価すれば¹⁾。

ある時、マルスの子は、森の中で朝食を取っていた時、大きな猪が横切つて、うっそうとした繁みの中に入っていくのを見た。ボレスワフは、ただちに食卓から身を起こし、槍を持って猪を追った。大胆にも御付の騎士も犬も連れずに猪に襲いかかっていった。森の獣に近づいてその喉に一撃を加えようとした時、反対の側から御付の騎士が現われ、振り上げられた一撃を押し止め、ボレスワフから槍を奪い取ろうとした。その時ボレスワフは怒りに燃

二
二
二

え、驚くべきことに、大胆にも二重の闘いを、つまり人に対する闘いと獣に対する闘いを行い、それぞれを打ち負かした。すなわちその騎士から槍を取り返し、猪を刺し殺したのである。後にこの騎士は、なぜそんな事をしたのかと尋ねられた時、自分が何をしたのか覚えていないと言った。しかしながら、この一件によって彼は永い間ボレスワフの寵を失った²⁾。他方少年の方は、その地から疲れ切って帰り、扇の風をうけてやっと力を取り戻したのである³⁾。

(11) BOLES LAUS PUER INTERFECIT APRUM

Multa possem de audacia huius pueri scriptitare, : nisi tempus iam instaret ad summam operis properare. :

Tamen quoddam in oculo non permittam latitare,

Cum sit dignum ad exemplum probitatis rutilare¹⁾.

Quadam vice puer Martis ad gentaculum in silva residens, aprum immanem transeuntem, : ac densitatem silve subeuntem, : vidit, : quem statim de mensa surgens, assumpto venabulo subsecutus, : sine comite vel cane presumptuosus : invasit. : Cumque fere silvestri propinquasset : et iam ictum in eius gutture vibrare voluisset, : ex adverso quidam miles eius occurrit, : qui vibratum ictum retinuit : et venabulum ei auferre voluit. : Tum vero Boleslaus ira, immo audacia stimulatus, geminum duellum mirabiliter, humanum scilicet et ferinum, singulariter superavit : § Nam et illi venabulum abstulit : et aprum occidit. : Ille vero miles postea, cur hoc fecerit requisitus, : se nescivisse, quid egerit, est professus : et ob hoc tamen est ab eius gratia longo tempore sequestratus²⁾. : Ille vero puer inde rediit fatigatus : et vix tandem vires obtinuit ventilatus³⁾. :

二
二
一

1) [M] 四連の八音節トロカイックの詩。

2) [P] この騎士の振舞は、非常に疑わしい部分を持っていて、ボレスワフの命をねらった襲撃のように思われる。もし事件の細部について、もっと詳しく知ることができれば、この事件の中にシェチェフの手が伸びていることがわかったかもしれない。

[訳注] マレチンスキもブレジニアと同様の解釈をしている。Maleczynski, *Bolesław Krzywousty* p. 27.

3) [P] 扇であおぐことは、当時、意識を蘇生させる素朴な方法であった。

第十二章

たとえ私が、妬み心を持つ人々に¹⁾あらゆる点で嫌われているとしても、前述の挿話に似た、彼の少年時代の別の出来事についても沈黙しないこととしよう。

さて、この少年がわずかな御供を連れて森を歩き回っていた時のことであった。彼がたまたま小高い丘の上に立って、下の方をあちらこちら見わたしていると、大きな雄熊が雌熊と戯れているのが目に入った。ボレスワフはこれを見ると、他の者はその場に停まるように命じ、自分はただちに低地に降り、大胆にも単身馬にまたがって、血に飢えた獣に近づき、肩を怒らしてボレスワフの方に突進してきた雄熊を一突きに刺し殺した。この出来事は、そこに居あわせた者にも、極めて驚くべき事柄であったが、それを目撃しなかった者にも、ボレスワフの勇気について語り聞かせるにふさわしい事件であった。

(12)

Aliud quoque factum eius puerile, : huic simile : non tacebo, : quamvis noverim quia emulis¹⁾, non per omnia complacere : Idem puer cum paucis in silva deambulans, : in eminenciori loco forte constitit, : ac deorsum huc illucque contemplans, : ursum ingentem cum ursa colludere prospexit. : § Quo viso statim aliis prohibitis in planiciem descendit, : ac solus et intrepidus equo sedens cruentas feras adivit, : ursumque contra se conversum brachiis erectis venabulo perforavit. : § Quod factum satis fuit illic astantibus ammirandum, et non videntibus pro tanta audacia pueri recitandum. :

1) [P] 年代記作者が、どのような行為に対する妬みを念頭に置いていたのか、はここからは不明である。

第十三章

とかくするうちにマルスの子ボレスワフは、力も年も増し加わり、年頃の少年が慣わしとするような贅沢と空虚な事柄に心惹かれず、敵が略奪を働いているとの知らせを受けると、それがどこであろうと、同年の少年達を率いてその場に休まず急行した。そしてしばしば秘かに少数の者を連れて敵の地に押し入り、村を焼き払い、捕虜と戦利品を奪い取った。まさにヴロツワフ公国を支配した者は、年齢は少年であったが、勇気にかけては老成の人であった。しかし彼はまだ騎士の身分に達していなかったのである。

こうして、彼こそ才豊かな優れた若者になるのでは、という希望が芽生えた。そしてすでに彼の中に騎士としての栄光を示す明らかな徴が見えたので、諸侯達はすべて彼に親愛の情を抱いたのである。というのは、彼らは彼の中に未来を約束する偉大な何かを感じ取ったからである。

(13)

Interea Bolezlauus, Martialis puer, viribus et etate crescebat, : nec ut assolet etas puerilis luxui vel vanitatibus intendebat, : sed ubicumque hostes predas agere sentiebat, : illuc inpiger cum coequevis iuvenibus properabat : § et plerumque furtim cum paucis terram hostium introibat, villisque combustis captivos et predam adducebat. : Iam enim ducatum Wratislauensem puer etate, : senex probitate : retinebat, : necdum tamen militarem gradum attingebat. : Unde quia spes in eo iuvenis bone indolis pullulabat : iamque magnum in eo glorie signum militaris apparebat, : omnes eum principes diligebant, : quia futurum in eo magnum aliquid perpendebant. :

二〇九

第十四章

さて、マルスの後裔として生まれたこの少年は、ある時ポモジャに馬に乗

って出征した。そしてその地で自分の名をさらに輝かしいものにした。

すなわち、かくも多くの軍勢によりて

ミェジジェツツ¹⁾の砦を包囲せり²⁾。

またかくも激しく急襲したので、砦の者達は、わずか三日で降伏せざるを得なかった。その地ではまた家令ヴォイスワフ³⁾が頭の頂きに勇気の印を受けた。しかし優れた医師の技が、彼の体から骨片を引き抜いて命を救ったのである。

(14)

Idem vero puerulus, : Martis prole progenitus, : quadam vice super Pomoraniam equitavit, : ubi iam evidencius famam sui nominis propalavit. : §

Namque castrum Meczirecze¹⁾ tantis viribus obsedit²⁾ tantoque impetu assultavit. : quod paucis diebus oppidanos dedicionem facere coartavit. : § Ibi quoque dapifer Woyslauus³⁾ in vertice tale signum audacie comparavit, : quo vix eum extractis ossibus operatio sagax medici liberavit. :

1) [P] おそらく、今日のジェローナグーラ県の北部に位置する、オドラ川河畔のミェンジジェチの町を指す。

2) [M] 二連の八音節トロカイックの詩。

3) [P] このヴォイスワフをボレスワフ・クシヴウスティの守役“piastun”と見なす見解もあるが、確かなことは不明である。

第十五章

倦むことを知らない少年ボレスワフは、その地から帰った後も、騎士達に少しばかりの休息を与えたが、すぐに彼らをその地に連れ戻した。彼は夷狄の土地を従えることを熱望したので、まず戦利品を奪い放火するなどということは考えず、ひたすら彼らの砦や都市を占領し破壊しようとしたのであった。そして、兵士を駆り立て、極めて有名で堅固な城塞に突進し、それを包囲した。この城塞は彼の最初の急襲すら耐えることができなかった。ボレス

ワフはそこから多くの戦利品と捕虜を取り、また城塞の兵士達を戦争の法の下に置いた。

こうしてボレスワフがますます愛されるべき者になればなる程、彼はますます多くの者の嫉妬を掻き立て、彼の滅亡をねらう敵の奸計を招くこととなった。

(15)

Inde regressus quieti militum aliquantulum indulsit, : eosque statim illuc puer laboriosus reduxit. : Qui regionem barbarorum subiugare concupiscens, predas agere prius vel incendia facere non conatur, : sed eorum munitiones vel civitates obtinere vel destruere meditatur. : Igitur gressu concito quoddam nobile satis ac forte castrum obsessurus invasit, : quod tamen eius primum impetum non evasit. : § Unde predam multam et captivos egit, : bellatores vero sentencie bellice redegit. : § Et quo magis amari debuit, : eo sibi maiorem invidiam cumulavit, : et inimicorum insidias ad suum interitum provocavit. :

第十六章

この間に、シェチェフは、伝えられるところによると、二人の少年に対して奸計を企み、多くの策略を用いて、父親の気持を少年達への愛情から逸らそうとした。

さて、シェチェフは、領土としてこの少年達に任せられた城に、自分の氏族出の者か、あるいは身分の低い者達を、伯として、また代官として任命したり。これらの者は、二人の少年の命令に服しなければならぬ身でありながら、シェチェフによる巧妙で狡猾な策によって、少年達の命令に従わないようにと唆されていた。実際、シェチェフは、二人の兄弟にとって不穏な陰謀の主となったのである。しかし、それだけにいっそうシェチェフは、嫡子であり、鋭敏な精神の持ち主であり、また父の没後、王国を支配することになるボレスワフを自分の不幸の源として恐れていた。

一方、兄弟達は、もしシェチェフが二人のうちのどちらかに奸計をしかけ

てきたら、一方は他方に対して、全力で間髪を入れずに援助に駆けつけることを相互に誓約し²⁾、そのための印を定めた。

さて、狡猾な策略によるのか、あるいは事実に基くものかは不明であるが、ウワディスワフ公は、少年ボレスワフに、ボヘミア人がポーランドに侵入し略奪を働こうとしているとの斥候の話を告げた。そして公は、これに対処するため、ボレスワフに、定められた場所にできるかぎり早く急行し、自分の公国の伯達を援軍として召し出すように命じた。しかし、これらの伯達は、シェチェフが任じた者であり、少年ボレスワフは彼らを少しも信用していなかった。少年は父親の命令に従い、父親を信じて、定められた場所に腹心の者達とともに急行し、いささかの疑いも抱かず突き進んでいった³⁾。しかし、ボレスワフの後見役を任じられていたヴォイスワフ伯⁴⁾は、ボレスワフの後に続こうとはしなかった。しかし人々は互いに囁き、それは裏切りの印ではないか、と疑った。彼らは次のように言う。「あなたの父があなたに寂しい荒野の地に赴くように命じ、しかもあなたの命を狙う者をその地に援軍として派遣したのは、危険な訳なしにはありえないことだ。また、シェチェフが、あなたの一族をすべて、とりわけ王国の相続人であるあなたを、あらゆる方法を用いて滅ぼそうとし、また自分の手に収めたポーランドを確実に一人占めしようとしていることを我々は知っているし、また確信している。さらに、我々の後見人であるヴォイスワフ伯は、シェチェフの縁者である⁵⁾。その彼が、もし我々に対して何かの謀が企てられていることを知らなかったならば、必ず我々とともに、ここに到着していたはずである。それゆえ、我々に降り懸かるこの危険から逃れるために、できるかぎり早く何らかの策を見出すべきだ。」人々がこのような言葉を述べると、少年ボレスワフは激しい不安に襲われ、流れる汗と涙で全身を濡した。だが、彼らは非常に時宜にかなった方策を採り、少年ボレスワフの提案に従って⁶⁾素早くズビグニエフのもとに使者を派遣し、その使者に約定された印を持たせ、できるかぎり早く軍勢を率いて援けに来るように要請した。そして彼ら自身は、敵の策によってヴロツワフが先に占領されないように、ただちにヴロツワフの都市に帰った。

少年ボレスワフは、ヴロツワフに帰ると⁷⁾、まず第一に都市の有力者と長老を召集し、次いで全住民を集会に集め、どのような陰謀が次々とシェチェフによって加えられたか、を子供のように涙を流しながら語った。その場に居

合わせた人々は、それを聞いて、少年ボレスワフに心を寄せ、涙を流しながら、その場に居ないシェチェフに憤怒と悪態を投げつけた。その時、ズビグニエフがわずかの手勢を率いて急いでやってきた。彼はまだ大軍を集めていなかったのである。ズビグニエフは、教養人として、また年長者として、巧みな言葉使いによって弟の話を飾り立てた。また興奮して騒いでいる民衆に対して、弟への忠誠とシェチェフへの敵愾心をすばらしい雄弁によって⁸⁾激しく訴えた。「市民達よ、もしも我等の先祖や⁹⁾、また少年の身¹⁰⁾の我等に対するあなた方の揺るぎない堅固な忠誠心がよく知られていなければ、またそれが信頼できるものでなかったならば、これ程多くの困難に悩まされ、また敵の攻撃に追い立てられている我等は、少年にありがちな無力感に陥ったであろう。そして逃亡と救いへのすべての希望をあなた方の肩の上に置くことはなかったであろう。しかしながら、遠方の部族出身の者にも、近くの部族出身の者にもあなた方が深くひとつの事柄に心を悩ましてきたことは、全くよく知られたことである。すなわち、我が一族の相続を絶やし、自然の秩序に従った君主の支配権の継承を不当に振り曲げようと画策している人々が我々の命を奪う謀を企てているのである¹¹⁾。

他方、老いと病いによって弱くなられた我々の父は、すでに自分自身や我々の事や祖国^{パトリヤ}について配慮する力を無くしておられる。

我々は、あなたがたの保護を信じているが、今や野心家の剣によって、また彼らの悪業によって滅びるか、あるいはポーランドの国境を越えて追放の身となるか、どちらかの道しか我々には残されていない。それゆえ、ここに留まることが許されるのか、それとも祖国を去らねばならないのか、我々にあなたがたの心を明らかにしてもらいたい」。この言葉に多くのプロツワフ人は皆、悲しみのあまり心の底まで揺り動かされ¹²⁾、しばらくは声もなかった。しかし、突然大声を上げ、異句同音に、また親愛の情を込めて、彼らの心のうちを表明した。「まことに我等は、生きている限り、あなた方の父上であり、また自然にかなった君主であられる方に忠誠を誓い続けるつもりだ。同じく、我等に命の息がある限り、彼の子孫に背くつもりも毛頭ない。それゆえ、我等に対して、いかなる不信も抱きたまうな。今や、軍勢を集め、武具を帯びて父上の宮廷に急ぎたまえ、また父上に対して敬意を表した上で、あなたがたが蒙った不正の償いを要求したまえ」。これらの言葉がここまで語られ、ま

たそれが市民達による宣誓によって確認された時、少年ボレスワフの後見役であったヴォイスワフ伯が¹³⁾、自分の奉仕義務としてこの地に到着した。彼は、ここで何が起こったか知らなかった。しかし、彼がシェチェフの緑者であるとのことから¹⁴⁾、裏切りの嫌疑がかけられ、町に入ることも、少年の身辺を世話することも禁じられた。それゆえ彼は、争いが生じたことについては、全く知らなかったと、自ら弁明したが、少年達は、この時、弁解をしようとして彼らの後を追ってきたこの者を決して受け入れず、大軍を召集して、父親のいる所に向けて出発した。

さて、ウァディスワフ公と彼の息子達は、ジャルノヴィエツと呼ばれる所で¹⁵⁾それぞれ別々に軍勢とともに宿営した¹⁶⁾そこで使者を通じて長い間、互いに論争し合ったが、結局、若者達は有力者の忠告と、また彼ら自身による脅迫によって、老父にシェチェフを引き渡すことを強制した。父親は、そこで息子達に向って、これ以後は決して彼を元の地位にもどすことはない、と誓ったといわれている。

こうしてシェチェフが自分と同じ名前のシェチェフ城に逃げ込むと¹⁷⁾、兄弟達は、武装を解き、恭々しく、また穏和に父親の下に赴き、支配権を有する君主としてでなく、騎士や僕として、砕かれた心と折れ曲った首すじを差し出し、自分達の恭順の意を表明した。こうして、父と息子達とすべての有力者は一つに結びつき、全軍を率いて自らが建てた城に逃げたシェチェフを追跡した。こうして人々がシェチェフを追い、国から彼を追放しようとしていた時、ウァディスワフ公は、ある夜、自分の寝台で休んでいると思われていたのに、身内の誰も気付かないうちに公自ら最も親しい三人の従者を連れて秘かに軍勢を抜け出し、ヴィスワ川の一方の岸から舟でシェチェフのいる所に渡っていった。これに対して、すべての有力者達は、憤り、「息子達やすべての君侯をその軍勢とともに見捨てるのは、賢明な人間のすることではなく、乱心した者のすることである。」と宣言し、ただちに協議を行い、「ボレスワフは王国の首都サンドミエシとクラコフおよびその近隣の地を占領し、忠誠の誓いを受けたあとでその地を君主として領有すべし、またズビグニエフは、マゾフシエに急ぎ、プウォツクの都市と¹⁸⁾それに隣接する地域を占有すべし。」と決議した。実際、ボレスワフは上に挙げた都市を占領し、自分の手に確保した。しかしズビグニエフは、父親に先を越されて、自分の企てを遂行する

ことができなかった。

しかしながら、なぜこんなにも長くシェチェフの陰謀の結末を長引かせる必要があるのだろうか。もしもシェチェフをめぐる個々の難事と抗争を描こうとするならば、シェチェフに関わる事蹟は、疑いもなくユグルタ戦記に匹敵するであろう¹⁹⁾。しかし、愚かであり、無気力であると思われぬように、始められたこれまでの道筋をもう少し進めてみることにしよう。

ある時、この少年達は、諸侯と軍勢を召集し、プウォツクの町に対して、ヴィスワ川の対岸に陣を張った。その場所で、信仰厚い老司教マルチンは²⁰⁾、大変な労力を払い、また非常に慎重に、父と息子達の間での怒りと不和とを和らげたのであった。その場でもまたヴァディスワフ公は、これ以上はシェチェフを手許に置かないと宣誓し、確約したといわれている。その時、ボレスワフは父親に占領した首都を返還した。しかし父親は息子達と結んだ約束を守らなかった。結局、少年達は、父親にシェチェフをポーランドから追放させ²¹⁾、それによって自分達の希望を実現させたのである。しかし、この事がどのようなやり方で実現したのか、またシェチェフがどのようにして帰国したのか²²⁾、それらの事柄を細かく説明することは、冗長であり、退屈でもあるだろう。それゆえ、以上の叙述で十分なものとしていただきたい。なぜならシェチェフには二度といかなる権力も許されなかったからである²³⁾。

(16)

Interea namque Zetheus multas, ut ferunt, ipsis pueris insidias pretendebat, : ac paternum animum ab affectu filiorum multis machinationibus avertebat. : In castellis etiam puerorum partibus deputatis aut sui generis, aut inferioris, : quibus dominarentur, comites vel pristaldos preponebat¹⁾, : eosque pueris inobedientes existere versuta calliditate commovebat. : § Ambobus siquidem fratribus infestus insidiator existerat, : sed magis tamen Bolezlauum, legitimum et acrem animo, post patrem regnaturum suo infortunio metuebat. : § Ipsi vero fratres iureiurando se coniunxerant²⁾ : et inter se signum fecerant, : quod si Zetheus eorum alteri machinaretur insidias, : alter alteri subvenire cum totis viribus suis nullius more pateretur inducias. : § Contigit autem, nescio vel

calliditate, : vel rei veritate, : ducem Wladizlauum Bolezlauo puero mandavisse : se Bohemos in Poloniam intraturos, : predam facturos : ab exploratoribus audivisse ; : § quapropter oporteret eum ad locum citissime determinatum properare : et comites sui ducatus, quos Zetheus prefecerat : et in quibus puer nullatenus confidebat, : in auxilium advocare. : Puer vero paternis iussionibus credulus : ad locum constitutum cum suis collateralibus festinus, : nichilque dubitans³⁾ incedebat, : sed cum eo tamen comes Woyslauus⁴⁾. : cui commissus erat, non pergebat. : § Unde unus ad alium in vicem susurrantes, : utpote signum traditionis suspicantes : : Non es inquiunt, sine causa periculi, quod pater tuus te precepit ad locum solitudinis ambulare : et insidiantes vite tue Zethei familiares et amicos illuc in auxilium advocare. : § Scimus enim et certi sumus, quia Zetheus totam tuam progeniem teque maxime nititur, ut heredem regni, modis omnibus abolere, : solusque totam sub manu sua captam Poloniam retinere. Insuper etiam Woyslauus comes, cui commissi sumus, qui propinquus est Zetheo⁵⁾, nobiscum procul dubio advenisset, : ni machinamentum aliquod nobis fieri cognovisset. Unde necesse est citissime nos consilium aliquod invenire, : quo possimus istud periculum nobis imminens preterire. Hiis dictis puer Bolezlauus vehementissime metuebat, : totusque sudore et lacrimis manantibus affluebat. : Accepto itaque convenienti satis consilio, secundum ingenium puerile⁶⁾ velociter ad Zbigneum, ut ad se cum suis quantotius in auxilium properaret, : cum signo constituto transmiserunt, : ipsique statim ad urbem Wratislaviensem, ne preoccuparetur ab insidiatoribus emuli redierunt. : § Regressus igitur puer Bolezlauus⁷⁾ inprimis maiores et seniores civitatis deinde totum populum in concionem advocavit : eisque, quas a Zetheo paciebatur insidias ex ordine, sicut puer cum lacrimis enarravit. : Illis econtra pre pietate pueri lacrimantibus : et iram indignacionis in Zetheum absentem verbis ignominiosis iactantibus, : Zbigneus cum paucis, nondum collecta multitudine, properanter adveniens, orationem fratris, ut litteratus et maior etate, rethorice coloravit : ac populum tumultuantem ad fidelitatem fratris et contrarietatem Zethei luculenta oratione⁸⁾ sequenti vehementer animavit : : Ni⁹⁾ vestre fidei, cives, stabilitas inviolabilis nostris antecessoribus nobisque, licet parvulis¹⁰⁾, nota fuisset et experta : nequaquam puerilis etatis inbecillitas tantis calamitatibus attentata, :

totque faccionibus inimicorum agitata : totam refugii spem in vobis et consilii posuisset. : § Sed notum constat exteris nationibus et propinquis vos multa perpressos pro insidiis vite nostre¹¹⁾ machinantibus ab hiis, qui successionem nostri generis nituntur penitus abolere, : dominorumque naturalium hereditatem ordine prepostero distorquere. : Quapropter, quia senio iam confectus genitor noster et infirmitate sibi nobisque vel patrie minus prevalet providere : necessarium est nos in vestro fretos presidio, gladiis ambitiosorum vel maleficiis interire, : vel in exilium fugientes fines Polonie transilire : Unde vestrum dignemini nobis animum aperire, : si manere liceat, vel de patria nos exire. : Ad hec multitudo tota Wratislaviensium dolore cordis intrinsecus tacta¹²⁾, paulisper conquievit, : erumpensque statim in vocem, intentionem mente conceptam unanimiter cum affectu pietatis aperuit. : Nos quidem, inquietes, fidem servare volumus : domino nostro naturali, patri vestro, dum vixerit nec eius soboli deficiemus, : quamdiu nobis flatus vitalis affuerit. : Igitur de nobis nullam diffidentiam habetote, : sed exercitu congregato ad curiam patris armati properate, : ibique salva reverentia paternam vestram iniuriam vindicate. : § Que dum adhuc dicebantur : et inrejurando a civibus firmabantur, : Woyslauus comes, qui puerum Bolezlauum nutrebat¹³⁾, : de servitio suo veniebat : et que fiebant ignorabat. : Qui suspectus prodicionis ob Zethei consanguinitatem¹⁴⁾ est habitus et civitatem introire : rebusque pueri providere : prohibitus. : Illo autem satisfaccionem proferente : se, si quid controversie contigerit, nescivisse satisfacere volentem, : eosque subsequentem, : nequaquam pueri tunc temporis receperunt, : sed obviam patri collecta multitudo processerunt. Igitur dux Wladislaus eiusque filii in loco, qui dicitur Sarnouecz¹⁵⁾, seiunctis fillis a patre, cum exercitibus consederunt¹⁶⁾ : ibique diucius inter se legacionibus altercantes. vix tandem consiliis procerum : minisque iuvenum : Zetheum dimittere senem pueri coegerunt. : § Aiunt etiam patrem ibi filiis iurasse, : numquam se deinceps eum ad honorem pristinum revocare. : Ad castrum itaque sui nominis¹⁷⁾ Zetheo fugiente, ad patrem fratres humiliter inermes et pacifici perrexerunt, : eique non ut domini, : sed ut milites vel servi : suum obsequium pronis mentibus et cervicibus obtulerunt. : Sicque pater et filii cunctique proceres cointi, : Zetheum fugientem ad castellum, quod fecerat, cum toto exercitu sunt

secuti. : § Quem dum persequi et extra terram expellere conarentur, : ipse dux noctu, cum lectulo suo requiescere putaretur, : nemine suorum conscio, cum tribus exceptis familiaribus exercitum latenter exiens, ad Zetheum ex altera parte Wysle fluminis cum navicula transmeavit. § Unde cuncti proceres indignati asserebant, quia deserere filios totque principes cum exercitu non sapientis, : sed consilium delirantis, : statimque facto consilio decreverunt, quatenus Bolezlauus Sudomir et Cracow, sedes regni principales et proximas, occuparet, : easque fidelitate recepta in dominium possideret ; : Zbigneus autem contra Mazouiam properaret : et urbem Plocensem¹⁸⁾ illamque plagam contiguam obtineret, : § Bolezlauus quidem sedes predictas occupavit et tenuit, : Zbigneus vero, preventus a patre, suum ceptum explicare non potuit. : Sed quid tam diu finalem causam Zethei faccionis prolongamus ; : si labores singulos et dissensiones Zethei describamus, : gesta Zethei procul dubio Iugurtino¹⁹⁾ volumini coequamus. : Et ne tamen insulsi vel desidiosi videamur, : ceptum iter adhuc aliquantulum gradiamur. : Item alio tempore pueri principes et exercitum asciverunt : et contra Plocensem urbem ex altera parte Wysle fluminis castra militie posuerunt ; : ubi etiam Martinus archiepiscopus²⁰⁾, senex fidelis, magno labore magnaue cautela iram et discordiam inter patrem et filios mitigavit. : Ibi quoque dux Wladislauus, ut aiunt, iureiurando se Zetheum retenturum numquam amplius confirmavit. : Tunc Bolezlauus patri sedes occupatas restituit, : nec pater cum filiis paecionem factam obtinuit. : § Ad extremum in tantum senem pueri coegerunt, : quod Zetheum de Polonia propellendo²¹⁾ suum desiderium impleverunt. : Qualiter autem hoc contigerit, : vel qualiter de exilio redierit²²⁾, : prolixum et tedium est edocere, : sed hoc dixisse sufficiat, quia postea non sibi licuit ullum dominium exercere²³⁾. :

1) 〔訳注〕 ブリスタルドスについては第四章の注（12）を参照。

2) 〔M〕 この誓約は、一〇九九年か、一一〇〇年に結ばれたと思われる。

Maleczyński, *Bolesław Krzywousty* p. 21.

3) 〔M〕 Act. 10-20 "vade cum eis nihil dubitans" 『使徒言行録』 一十一-二十「ためらわずにいっしょに出発なさい」。

4) 〔P〕 以下の叙述から明らかなようにヴォイスワスはシェチェフと同族の者であり、ただボレスワフに対する後見役の職に就いていただけでなく、ボレスワフの若衆組に対しても後見の権利を持っていた。ヴォイスワフ自身の氏族に関しては、証拠となる

ようなものが欠けている。ボヴァウ族出身という推定がなされている。Semkowicz, *Ród Powatów, Sprawozdania PAU* 1914. t. XIX. nr. 3.

- 5) [M] ヴォイスワフは二人の妻を持っており、一人はキェルツェ地方の娘であり、もう一人は、名をドビェフナと呼ばれたキリアの娘であった。彼らのうち一人がシェチェフと同じ氏族の出である。
- 6) [M] ボレスワフは、ボヘミアに対する戦争には反対であった。というのは、一〇九九年にブジェチスワフ二世と同盟を結んでいたからである。
 [訳注]『コスマの年代記』第三卷第九章に次の叙述がみられる。“Item eodem anno dux Bracizlaus in nativitate Domini Bolezlaum per sororem sibi propinquum invitat ad convivium quod erat in urbe Satec dispositum, ubi in ipso festo, consentientibus omnibus comitibus Boemiae, factus est Boleslaus ensifer avunculi sui. Quem post festum dux remittens ad propria, dono dat sibi et constituit quatenus ensiferae dignitatis pro ministerio ex tribato, quod pater suus Wladizlaus solvebat annuatim semper, 100 marcas argenti et 10 auri talenta habeat.”
 「その年(一〇九九年)のクリスマスの日に、ブジェチスワフ公は、自分の甥のボレスワフを、ジャテツという町で用意された宴会に招待した。その祭日の日に、その場所で、ボヘミアのすべての伯の同意の下に、ボレスワフは、公の帯剣騎士に任じられた。公は、宴会の後に、ボレスワフを彼の公国まで送り返したが、その時、ボレスワフが帯剣騎士としての務めを果たすことができるようにブジェチスワフ公は、ボレスワフの父ウァディスワフが毎年、ブジェチスワフ公へ差し出していた貢納金から、百マルクの銀とナタレントの金をボレスワフに与えることを定めた。」
- 7) [訳注] ブイノッホは、この箇所を『コスマの年代記』第3卷第九章の文章(前掲の注参照)と関連させている。つまり、ボレスワフは、チェコ公ブジェチスワフの招きによる宴会からプロツワフへ帰った。と読んでいる。
- 8) [M] Sallust, *Bellum Catilinae*, 31-6. “orationem habuit luculentam atque utilem rei publicae.” サルスティウス『カティリナ戦記』三一一六「国家に対する有益なすばらしい演説をした」。
- 9) [M] Sallust, *Bellum Catilinae*, 20-2 “Ni virtus fidesque vostra spectata mihi forent, nequiquam opportuna res cecidisset.; spes magna, dominatio in manibus frustra fuissent, neque ego per ignaviam aut vana ingenia incerta pro certis captarem. Sed quia multis et magnis tempestatibus vos cognovi fortis fidosque mihi,” サルスティウス『カティリナ戦記』二〇一二「もしもあなたがたの勇氣と信義を知らなかったら、展望は決して生じなかったであろう。また私も臆病と揺れる心によって、確信を抱くかわりに不安を抱いたであろう。しかし多くの、また大きな危機の中で、私は、あなたがたが勇敢で、私に忠誠を表わしていることを知ったので」。
- 10) [P] ここで年代記作者は、——この演説は、サルスティウスの『カティリナ戦記』第二章第2節を範として、作者の手によって作成されたものだが——少々深入りして、すでに(第四章)で述べたことを忘れている。すなわち、そこで作者は、ズビグニエフを「成年」と者と述べている。ここに記された事件は、ほぼ一〇〇〇年ごろ生じた事柄であるから、その時ズビグニエフは、二七才であり、ボレスワフは十四才か十五才であった。
- 11) [M] 作者ガルは、一〇九三年になされた事柄(第十一章の熊退治の件)をそのような企てと考えている。
- 12) [M] Genesis, 6-6 “tactus dolore cordis intrinsecus” 『創世記』六一六「悲しみの

あまり、心の底まで揺り動かされ」。

- 13) [M] ヴォイスワフは、一〇九七年以降、ボレスワフの教育係であった。そしてシェチェフは一〇九三年から、ボレスワフの教育を監督していた。
- 14) [M] 作者はヴォイスワフを、ある時はシェチェフの縁者 “propinquus” と言い、ある時は彼の血縁者 “consanguineus” と言っている。
- 15) [訳注] Zarnowiec — ピリシア川上流（ヴィス川支流）の町。
- 16) [M] 父親に対する二人の兄弟の戦は一〇〇〇年に行われたと思われる。
- 17) [訳注] ヴィスワ川中流のシェチェフ Sierichów。
- 18) [訳注] ヴィスワ川中流の都市 Płock。
- 19) [P] 『ユグルタ戦記』— ローマの高名な歴史家サルスティウスの作品。我が年代記作者は、確実にこの作品を知っていた。[M] ユグルダの運命、すなわち、牢獄における死をシェチェフのそれに重ねたのではなかろうか。グロデツキは、宮廷伯は、目を潰されたのではないか、と疑っている。
- 20) [P] グニエズノの大司教マルチン。（在位は十一世紀と十二世紀の変わり目）我が年代記の第一巻は、まず最初に彼に捧げられているが、彼は当時、幾度もヴァディスワフ・ヘルマンと息子達との間の、また後にはズビグニエフとボレスワフの間の仲介人の役を演じた。作者は彼を好んで「信心深き老人」と呼んでいる。大司教はどちらかといえば、ズビグニエフの支持者に属していた。
- 21) [訳注] グンプロヴィッチは、シェチェフのポーランド追放の年を一〇九八年としているが、マレチンスキは、一一〇〇年としている。M. Gumplowicz, *Zur geschichte Polens im Mittelalter*, p. 43. K. Maleczyński, *Bolesław Krzywousty*, p. 21.
- 22) [M] グロデツキは、シェチェフは自分の意志で帰国した、と推測している。R. Grodecki, *Zbigniew*, p. 92.
- 23) [P] この箇所においても表出している謎めいた表現は、シェチェフの終焉は取り上げない方がよい微妙な問題を含んでいることを推測させる。